明治卅六年四月五日第三種郵便物認可　毎月一回一日發行

家庭雜誌

第四巻
第二號

明治三十九年二月一日發行

Dai 4 Kan.　KATEI ZASSHI　Dai 2 Go.

由分社
東京市麹町區元園町壹丁目廿七番地


最新化粧料皮膚有効
ブリアンチン
薬學博士
下山先生御證明
皮膚病専門獨逸ドクトル
加藤先生御證明
此ブリアンチンは両専門大家御證明の如く適當なる原料を配伍し且つ高等の香料を加合したる最新化粧料にして皮膚衛生上及び交際場裏には必要欠くべからざるものなり世の夫人令孃方速に用ゐて其眞價を知り玉へ
用法
ブリアンチンは湯より上りたるとき。顔を洗ひたるとき。水をつかひたるとき。おしろいをつけるとき。手のひらにてぬるべし
又おしろい下としてはブリアンチンにまさるものなし
定價 大瓶 貳拾八錢 小瓶 拾五錢 特別（御進物用）参拾五錢
發賣元 東京市京橋區南紺屋町 三光堂
電話新橋四〇二三番

(大國社意匠)

第五回内國勸業博覽會出品有効賞牌受領

貳等賞 褒賞受領

參等賞 褒賞受領

御半ゑり帶揚類

嶄新意匠案出 魁の特長なり

染模様 縫模様 絞り形 染絞り模様

ゑり治販賣品概目

○四季草花半ゑり○四季花鳥帶揚○下締め 別織六寸巾 伊達巻博多○小女方御祝用しごき 一丈餘房付○四季冬夏肩掛 縮緬

旭織 華絨 レース、東 絹毛 尼花 シヨール○夏秋草花 け出し 裾よけ絹縮 裾模様縮緬 別織四尺巾 絽縮緬其外○四季草花 帶片側地 丸帯 其

鹽瀬 羽二重 絹縮 山繭 格子地 絽 縮緬 絽絹 ちゞみ 其外○おこそ頭巾 御紋入角に 絞り模様入○懷中 御祝 帛紗地○兒女方 涎かけ○同守

巾着○西京御召 前かけ地 其外 夏用○特色 別染 浴衣地 瓦斯縮 島縮み 瓦斯眞岡 島眞岡 絽縮 紅梅織 小紋染 染柄 り入 格子島 中形 大柄 小島柄 絞 模様 抜染

數稀 絞り○染形 兵兒帶地 縮緬 羽二重地 絹縮 大中巾小巾 中小巾旭織其外 染色 白地紺地 流行色○定田 絞り 手がら 髷掛○帶留め類

美人ひも 日本じめ 古頭ひも 式部じめ○たづな絞り 下じめ用 帶とめ用○有効褒狀各通受領 襟飾子キダイ

金具付 丸ぐけ 附かへひも 數稀 戰捷柄

(太ダヒー 細ダヒー)染模様 縫刺模様 其他嶄新優美考案柄 ゑり治形すゞめ形まけ入 發賣元 おろし 小賣とも

○高等洗粉 顔肌美白 チヱリー 香料 バイオレット 雲南麝香入 定價 大瓶參拾錢 小瓶拾貳錢 袋入三錢 發賣元 本舖

農商務省認可 登錄商標

東京新橋竹川町十二番地 電話新橋二〇二七 本店 ゑり治

同 神田表神保町一番地 電話本局九五二 支店 ゑり治

同 新橋際帝國博品館内階下 出張店 ゑり治



改良ロンテニス

二重枠ラケット一組

一號品		一二、五〇〇
二號品		一一、〇〇〇
三號品		八、八〇〇
四號品		七、四〇〇
五號品		六、七〇〇
六號品		五、七〇〇
七號小學用		四、七〇〇
八號婦人用		六、〇〇〇
九號婦人用		七、〇〇〇



ピンポン室内テニス

一號	一箱	一、二二〇
二號	同	一、五〇〇
三號	同	一、六八〇
四號	同	一、八三〇
號外	同	〇、八八〇

改良テニスネット

一號	一張	四間半	一、七五〇
二號	一張	五間半	二、二五〇
三號	一張	六間	二、四五〇
四號	一張	七間	二、九五〇

ゴム入フートボール

二號	一個	四、〇〇〇
三號	同	四、五〇〇
四號	同	五、〇〇〇
五號	同	五、五〇〇
六號	同	六、〇〇〇
七號	同	六、五〇〇
八號	同	七、〇〇〇

體操遊戲器械一切





東京神田裏神保町五

安藤商店

電話本局四百八十四

ローヤル水ハ

最モ高等ナル最モ進歩セル最モ名譽アル化粧水ナリ

定價 拾錢 拾五錢 廿五錢

ローヤル白粉ハ

最モ改良セル最モ優等ナル無害ナル白粉ナリ

定價 拾錢 拾五錢 五拾錢

發賣元 つやぶきん

東京銀座壹丁目

佐々木商店



家庭雜誌
第四卷第二號
明治三十九年二月一日發行

死ゆく母に代りて

利彦

（一）

君に托す　我が此子
此子守れよ　君が手に
我は依る　父の愛
死にゆく母の　頼みとて

（二）

世に托す　我が此子
此子育てよ　世の爲に
我は訴ふ　世の心
死にゆく母の　求めとて

（三）

人に托す　我が此子
此子生ひたて　人の手に
我は信ず　人の情
死にゆく母の　望みとて

（四）

神に托す　我が此子
此子なりゆけ　兎もかくも
我は安んず　神の命
死にゆく母の　悟りとて

醜惡なる家庭

深尾韶

（一）家庭の破壞

▲顧みれば今より數年前である。あちらにもこちらにも『家庭』『家庭』といふ聲が反響して、人は殆んど家庭より外に高尚、優美、純潔なる題目を見出すことが出來ないかの感があつた。『家庭の新風味』『家庭夜話』『家庭雜誌』『家庭の友』或は何、或は何、家庭に關する書籍雜誌は目まぐるしい程出版せられ、而して夫が羽でも生えた如く瞬く中に賣れ行いた。今の家庭に關する書物の多くは、其の時分の惰力で今日に至つて居るものが多いとの事である。

▲此の如く是等の書物が賣れたゞけでも當時如何に家庭といふものが人々の注目を惹いたかが判る。此く注目を惹いた丈けに、又色々に研究もされ、改良も企てられた。そして其間に多少の進歩發達はあつた。けれども別に家庭がよくなつたといふ譯ではない。それで

俄かに又悲觀する者も出て來て、とても家庭なんぞに安んずることは出來ぬと云ふやうにさへなつた。反動といふものは可笑しいものである。

▲家庭を貶す者は曰く、人間が此の社會に生れて來たのは何も安逸を貪る爲めに來たのではない。社會の爲め人生の爲めに何か偉大なる貢献を爲すべき天職を果すまでは、我々は絶えず奮鬪を續けて行かねばならぬ。然るに意志の弱き奴等が、世の波風に堪へず、家庭てふ小さな城廓を構へ、『他人入るべからず』といふ偏狭の濠を深くして、徒らに之に隱遁して世の中に打つて出づることを忘れて了ふとは、卑怯も亦極まれるものと謂ふべきである。閾を跨げば七人の敵があるとか、人を見たら盗賊と思へとかいふのは、未練至極な奴の言草である。よし七人の敵があらうとも、人が皆な盗賊であらうとも可いではないか。男子須らく敵中に突入するの勇氣なかるべからずである。吾々は此の小さき退嬰的、女性的なる『箇人の家庭』を捨てゝ、大なる、男子的、奮鬪的なる『社會の家庭』を採らねばな

らぬ。これ誠に人たるもの丶本懷では無い乎と。

▲然り、論者の言ふ如く、人間は當に此の社會に貢献すべく、家庭以上の事をも考へねばならぬ。避難の考のみを以て小さき『箇人の家庭』の中に隱遁してゐてはならぬ。さりながら人は此の小家庭を捨て丶大家庭にのみ生活することが出來るであらうか。小家庭を否認して大家庭をのみ是認することが健全な思想であらうか。吾輩大に疑ひなきを得ない。

▲人生の問題は、一は向上であつて、他の一つは生存であらねばならぬ。而して此の生存なるものは、向上といふ事よりも更に先決問題であることは言ふまでもない。生存の第一單位は自己であつて、第二單位が家庭、第三單位が社會であるならば、社會生活を論ずる前に先づ家庭生活を論ずるは、當然の順序ではない乎。況んや社會は大なる家庭にして、家庭は社會の見本たる意義を有するに於ては、又況んや社會の向上進歩といふものも端を家庭に發せざるものなきに於ては、家庭は人生の第一義といふも過言ではないと言て可い。

▲論者と雖も敢て之を知らぬではないらしい。けれども、今の所謂家庭なるものを見るときに、「理想」は遂に彼等をして斯かる憎惡の言を吐かしむるに至つたものであらう。吾輩と雖も亦時に『醜惡なる家庭』てふ感を切實にせざるを得ぬ場合がある。今の家庭ほど、清かるべくして汚れたるものは、眞に類が無いかも知れぬ。然り、汚れては居らう。墮落しては居らう。けれども吾輩は敢て之を見捨てやうとは思はぬ。否、見捨てたいと思はぬのみならず、どうにかして之を救ひ出だし、活き返らせて、美くしく清く正しきものにし而して、これよりして社會てふ大樹を空に屆くばかり靑々と生ひ茂らして見たい。今、次に此の家庭墮落の有樣を寫さんとするものも、全く病源を探つて之に適當したる投藥をなさんが爲めに外ならぬのである。

（二）夫婦とは名ばかり

▲世人が、此の美しき家庭を厭ふに至つた原因は、家庭が墮落して居るからであつて、家庭の墮落して居るのは、夫婦の關係がメチャ〳〵になつて居るからであ

る。夫婦は家庭の起りで、是聽て人生問題の起點であるからには、夫婦の關係を整へずして家庭を論じ、家庭を整へずして人生を論ずる者こそ、眞に其本を窮めずして末に走るものと評すべきである。

▲今の夫婦の關係、それは實にメチヤクチヤなものである。「合せ物は離れ者」など丶平氣で言つて居るものもある。此の如くにして漫然と夫婦になり、又無責任の離婚をやる。丁度隣人の靴を借りて來て、いやになつたら返すといふ工合である。これでは家庭も何も出來やう筈がない。

▲全體、世人の夫婦といふ觀念が間違つて居る。妻とは裁縫、料理等の出來る自働器械で、夫はそれを隨意に使用することが出來るのみならず、尙ほ其の器械備付の利潤として、それから情慾の滿足を取り、且つ子女を生殖せしめ得るのである。と云ふのが今の世人、殊に男子階級の得手勝手な規則、それを意氣地なくも女子が承認したのが、今の婚嫁制度。

▲そこで此の條件に合した女でさへあれば可いといふ

ので、愛などは全然そつちのけにされて、結婚が行はれる。考へて見ると、世の多くの女學校が良妻賢母を養成するとて授けつゝある學課が、よく此の條件に適合して居るから可笑しいではないか。其の裁縫、手工、料理などは自働器械たらんが爲めに、修身は夫に服從せんが爲めに、體操、生理學は生殖機關を發達せしめんが爲めに、教育、心理、等は夫の大切なる子を守り育つる役目を果さんが爲めにといふので、可憐なる幾十萬の少女は一齊に今それを學ばせられるのである。

▲結婚の根本要義たる『戀愛』は今の世に於て忘れられて居る。甚だしきは、戀愛は却つて神聖なる夫婦關係に禍ひし、結婚を破るものなるかの如く考へられて居る。婦人を『人』として男子と同等の位置にまで引擧ぐる所以なる所の『戀愛』は、即ち人（男子）をして『器械』と同位置にまで下らしむる所以であると考へられて居る。かるが故に、戀愛は侮蔑され、否定され、夫は人として、妻は器械として、合併することゝなつた。あゝ此の忌はしき結婚制度！結婚ではなくて

合併である。化合では無くて混合である。

▲此くして使用せられたる妻は、既に『人』ではなくて『器械』なるが故に、如何に酷使せられやうとも、如何に虐待せられやうとも、些の不平すら洩す權能はないのである。偶にブツ〱でも言はうものなら、早速『生意氣なる器械』として、不貞なる妻として、お拂箱てふ有り難からぬ運命に逢著するのだ。此の運命を畏み、凌辱され得るだけ凌辱されて、其の生涯を送る妻の身の上こそ、同情に堪へたるものではない乎。彼女は既に此世からなる地獄の中に埋葬せられて、希望なく光明なく、つめたく情けなく、泣いて、捨鉢の月日を暮らすのであるが、時としては大洋の氷山にも尙ほ小さき花を見るが如く、彼女の心にも亦情けの花を宿す機會が來る。是れやがて『姦通』なる汚名の下に、彼女が社會の有らゆる組織から痛擊を加へられる時である。されば少女の理想せる家庭は甘きこと蜜の如くなるも、愛なき結婚を遂げたる婦人の家庭は苦き事惡魔の毒藥の如きものでは無い乎。

▲死したるが如き妻の境遇は、之に接する夫をして遂に非常なる不快を感せしめぬ譯に行かぬ。その不快なる感、これ直ちに夫たる人の放蕩となる。一杯の酒を置くことを習ひし彼は、痛飲三斗、宵を徹して知らざるに至らねば止まぬ。一夜青樓に春を買ひしの彼は、流連十日、肉爛れ、骨腐るに至つて尙ほ顧みざるの人となるのだ。而して會々家庭に歸れば、妻は幽靈が澁柿を食つた樣な顏して、進まぬながら彼を迎へる。惡感、怨嗟。凌辱、嫉妬。壓制、反抗。打つ、泣く。蹴る、喚く。出て行け、行くとも。すべた阿魔、ひよつとこ野郎。あゝ此の如くにして夫婦の關係は破れ、此の如くにして家庭の骨子は崩れるのである。

▲妻の人格を亡みし、夫のみの利益を打算して打立られたる此の妻君器械主義は、必然の結果として、啻に社會の圓滑を缺きしのみならず、妻を殺し、夫を苦しめ、延いては大事の大事の家庭を破滅せしむるに及んだ。

▲愛なき結婚は竟に破鏡に至らざるを得ぬ。愛なき家

庭は竟に失敗に終らざるを得ない。苟も愛の其處に生ぜざる限り、名譽も富貴も、父母の力も、皇帝の權威も、遂に結婚を强ゆる事は出來ぬ。戀愛は男女の最高の權威で、結婚の要件としては、此以上に何者をも要せぬのである。此の戀愛よりして夫婦、親子、朋友等のあらゆる人倫が芽を出すのであるのに、今もし之を無視したならば、是即ち道德の出發點を破壞するものといはねばならぬ。今の『夫婦』とは此の道德以外に單に人と物との關係であつて、眞に『名ばかりの夫婦』であるのだ。此の如くんば吾輩も亦終に『家庭』を呪はざることを得ずである。

（三）所謂『親子』

▲我子の事を世人はよく『子寶』といふ。此の『子寶』なる語は、子供を父母の寶として珍重するといふ意味であると同時に、又之を一種の財寶として喜ぶ心が籠つてゐる。更に赤裸々に言へば、子は財產及び、それにつゝける幸福を稼ぎ出す所の一器械として親たちに歡迎されるのである。この意味に於て、子等は隨分親

の尊敬を受けることがあるけれど、人なるが故に子を尊敬するといふ親は殆んど無い。親の傍に居て、親の脛でも嚙つて居る子供と來たら、凌辱されること夥だしい。其の塲合には、親は非常なる權力者であつて、子は絕對の服從を强いられる。

▲其の强いるのが一の道德となつて居るから恐ろしい誰にもあれ若し此の『孝行』といふ道德から外れやうものなら、普天の下、率土の濱、身を置くに所なき悲境に沈まざるを得ぬ。されば彼の『女房喜べ、忰がお役に立つたぞえ』なる悲劇は躊躇なく演ぜられ、而して子たるものは此の果敢なき運命に滿足せざるを得ないのである。

▲曾て其の父の爲めに身を賣つて娼妓となりし娘があつた。彼女年甫めて十九、容色甚だ人に勝れて居たが、始めて客をとつた晩など、絕え入らんばかりに悲み、其後も大層はやつて、引く手あまたといふ全盛を極めたにも拘はらず、顏色は次第に沈鬱に陷ゐり、瘦せ衰へて來たといふ。それでも人が慰めて『お父樣の爲だ

から」といへば、其の寂しき顔にいつも一縷の光明が上つたさうだ。吾輩は、此くまで自然を賊し、人情を無視する「孝行」道德が憎くて堪らない。

▲子の生命をも、精神をも、肉體をも、殺して憚らざる此の孝行道德あるが爲めに、世の美くしさは如何ばかり損はれたであらう。子は先づ其の自由を希ふの憧れから、つひ父母に隱れて色々な事をする樣になり、親の壓制に反抗するためには、出來るだけ親の目を掠め、親を凌ぎ、親を馬鹿にして掛かる。折角の親しみは之が爲めに多くの部分を破壞されて了ふ。今の所謂親子なるものは大抵この類で、親子とは名ばかり、實は奴隸と其の主人との關係である。家庭の面白からぬも固より其處では無い乎。

▲おまけに、娘、子息の結婚となると、大抵の親が自分の配偶者でも定めるかの如く、勝手な選好をして子供の意志を曲げさせることが多い。男女の交際も許さず、配偶者の見立てもさせずに、全然親ばかりの相談で金や名譽に結婚をさせる固陋亂暴な親達もある。家

庭の圓滿を破るのは、半ばは此んな馬鹿親達の責任だといつても可い。

（四）舅、姑

▲世間の家庭を圓滿にするに就ての一難題は舅及び姑である。

▲長の年月、この憂き世に立つて、荒き浪風と戰ひ、子を生み、子を育て、產業を勵み、おのれの本分を盡すが爲には、自己の齡の重なると、頭髮の霜を加ふるとを介意せず、刀折れ、矢盡き、眼かすみ、耳聾し、而して煩雜なる社會より今や退隱しつゝあるもの、是即ち彼等舅姑なる所の老人たちではないか。

▲さらば、老人は吾等の元老、元勳者であつて、吾等は當に其の過去の功勞に報いんが爲、吾等の十分なる感謝を表明すべきである。然るに今、世の多くの家庭を見るに、老人は其の當然の尊敬愛重を受けざるのみならず、反つて邪魔物、厄介者として彼の所謂『しうと扱』を受けつゝあるは何故か。

▲吾輩思ふに、甚だ世間の娘、息の心得が惡るい。彼

等は老人の世に爲し來りし事業を無視し、其の功績を不用意千萬にも沒却して憚らざるものである。咄、こゝな短視者流、吾輩は世の凡べての老人に代り、一言汝等を叱り置く。

▲さりながら、世の老人なるものも亦甚だ宜しくない所がある。吾輩は此の點に於ては世の子たり、嫁たり、聟たる人に同情して、老人たちに一本まゐらざるを得ぬのである。試に思へ、老人といふものは實に不謹愼千萬のものではないか。彼等は動もすれば自己の過ぎし功勞に驕り、傲然たる態度を以て其の嫁、聟に對するのである。身體も自由に利かぬ癖に、チト遠慮して吳れゝば好いに、ソレヤレと馬でも追ひ使ふやうにされては、如何に老人ゆゑと忍耐しても、若き身たるもの遂に多少の癪たらざるを得ざるは、無理ならぬ次第と謂ふべしである。

▲それに熟々考へて見れば、嫁とか聟とかに貰つたものは、舅姑が敢て其の養育の爲に一擧手一投足の勞を取つたでもなく、全然無關係の者であつたのである。

それを今手に入れたからとて、そう現金に、食はれる米の代でも取返へすかのやうに、ガミ／＼と追ひ使つたり、小言を言つたりせずとも可いではないか。又そんなに言はれる義理でもあるまい。其の義理を踏み超え、人情を押し破つて、老人が家庭の内に奴隷制度を興し、ヤレ腰を揉め、肩を叩け、朝晩は乃公を禮拜しろ、オホン灰吹き、お脊中流しませうと氣が利け、と入らざる世話を燒き、餘計な干涉を試みるので、つひ／＼立てゝもよき靑筋を立てたり、陰口の一つも言く樣になり、かくて次第に家庭の平和は蹂躙されるやうになるのである。兎にも角にも此かる奴隷思想の舅姑と聟、嫁との間に蟠る間は、家庭は遂に其の醜惡より脫することが出來ぬ。

（五）主人と召使

▲召使、即ち下女、下男も亦「醜惡なる家庭」の一要素として、確かに一方の雄鎭である。家庭を以て奴隸制度の淵源となさば、そは必ずや此の主人と召使てふ關係より芽をふき出したものであらねばならぬ。

▲人は彼の所謂苦海に身を沈めたる娼妓の惨状を説く、而も未だ奉公人に思ひ及ばざるは迂濶も甚だしい事ではないか。起きる、寝る、働く、食ふ、遊ぶ、是れ皆な一として奉公人に自由は無い。一年三百六十五日、甚だしき家になれば僅か三日か四日より休暇も呉れず朝は夙に、夜は遲く、而して雨風の日と雖も、主人の命ならば謹んで其仰に從つて遠き使ひにも出でねばならぬ。あゝ此の如き慘憺たる境遇が、娼妓に勝つて居やうとは、吾輩はどうしても思ふことは出來ぬ。況んや娼妓には美衣佳肴の屢々來り見舞ふに會へども、下女下男は終歳つひに澤庵冷飯に甘んぜざるを得ず、而も彼の聞譯なき我儘の孃さま坊ちやんを取扱ひて因業なる主人夫婦の氣妻機嫌を取るの必勞を思へば、奉公人たるものは遂に呆然として自失し、若しも此身が出來るなら、娼妓幇間になつてなりと、此の苦しみを遁れたいものと泣くであらう。

▲「主從」てふ舊思想に驅られ、此く奉公人を泣かせて使ふ「主人」といふものこそ、憎むべく又哀れむべき

ものではないか。あゝ哀れなる飼主よ奴隷よ、汝等は何時までか其壓制の軛に泣き、何時までか其の不自然なる境遇に累ひせられて行くものぞ。

▲吾輩をして言はしむれば、今の「下女下男」なる文字が第一に悪るいと思ふ。我も人、彼も人、同じく人なる人の間に「下」の字を用ふるとは何といふ傲慢無禮ぞ。今の所謂下女下男なるものは、皆是れ我家庭を補助せんが爲めに、自己の便宜を棄てゝ我が家庭に投じ來りし恩人ではないか。此の恩人を呼ぶに「はした女」「しもべ」の名を以てするとは、何といふ得手勝手な、何といふ非道な振舞であらう。我が家族たるもの宜しく滿腔の感謝を以て、親切なる友人として彼等を待遇すべきである。此の如くにして始めて家庭の中に自由平等の和風は吹き、博愛平相の美花は爛熳と咲き亂れるであらう。

(六)家庭改革の方法

▲思へば世の家庭は實にも汚れ果てたものである。家庭を掩うて流るゝ潮、そは壓制、淫靡、反抗、矛盾。

妻は夫を怨み、子は親に乖き、風すさび、波怒りて、あはれ神の御園は、殘る方もなく打破られんとはするのである。

▲吾輩は溷濁せる社會より家庭を救ひ出して、今一たび光明の御空に凱旋せしめんが爲めに、敢て世の人士に告ぐ。諸君が其の惡弊ある家庭を改革するは、諸君が其天分の大なる部分を果す所以であると。

▲階級廢止は家庭改革の最初の第一歩であつて又最終の第一歩である。即ち苟も家庭を改革せんと欲する者は先づ此の階級といふ大魔物を退治して掛からねばならぬ。戸主、家長の名をば唯外部に對する責任者といふ意味に變へ、家庭とは其の家長が私利を營むために妻子眷屬を私有する場所なりてふ定義を滅して、新たに、夫婦、親子及び特殊の關係ある友人の快樂幸福を增進せんが爲に共同の生活を營む所なりてふ、簡單明白なる定義を下さねばならぬ。此の如くにして相助け、相愛し、相議して、命令もなく服從もなく、唯、親切なる助言と歡喜に滿てる一致とのみ、其間に行はれることゝなつたならば、家庭は如何に麗はしきものとなるであらう。

▲家庭内の奴隷制度が全然廢止せられて、自由なる一

致の現はれた時、其時こそ眞に家庭の高き使命が果される時である。世は嵐と荒ばゞ荒べ、世は常闇と變らば變れ、家庭は太洋中の珊瑚礁が、怒濤に難める帆船に暫しの憩ひを與ふるが如く、世の戰ひに疲れたる家人をして、安かに休息修養し得るの地を供するのである。

▲堅き珊瑚礁の幾群は、遂に太洋中の狂瀾をして、坦々砥の如き春海と變らしめる。健氣なる家風の若干群は、遂に慘憺たる社會を救ふの力なしと信ずることは出來ぬ。

▲唯だ自由、平等、博愛の根本思想、これ直ちに諸君の家庭を幸福にし、やがて又その社會生活を愉快にするの方法である。妻君を呼ぶに『さん附』を以てし、下女の爲めに給仕の勞を執り、如何なる場合にも叱責といふことを爲さぬといふほどの事は、我が進步的なる讀者の、實行を難しとせざるのみならず、或は既に之を行ひつゝある方もあるであらうと思ふ。唯この思想、唯この動作、これ實に今の世を動かして、理想の彼岸に導き得るものであるならば、吾輩は諸君が速かに其の全力を之に傾注して、『醜惡なる家庭』より眞の『善美なる家庭』に向ひて、先づ改革の旅程に上られんことを切望して止まぬものである。

おとぎばなし

謎の指環

渚山生

さる大家の一人娘に藤子と云ふ可愛らしい子が御座いました。容貌は好し、才はあるし、それに學問とても相應に出來て、外の友達には決して負けない程の勉强家でしたが、こゝに只一つ感心の出來ぬことゝ云ふのは、つまらぬ虚榮の心から、兎角他人に嘘をつく癖がある事です。

藤子の兩親も最初の内は、娘に限つて其樣なさもしい心を持つて居やうとは考へて居ませんでしたが、段々他人の噂や何かで其事を小耳に挾み、ついそれとなく氣を付けて居りますと、成程娘は不斷にいろ〳〵嘘を吐くのであります。兩親は大變に驚いて、其儘に捨てゝ置く事がどうも出來ません。若しもこの虚榮の嘘つきが評判になつて、近所に誰知らぬものもないやうになつたならば、忽ち一家の不名譽で、行末長く娘のためには此上もない障害物である。さてどうしたら好

い知らと、毎日毎夜心配に心配を重ね、寄ると觸ると兩親はその相談で持切りでした。すると、ある日の事です。矢張この家の親類筋の人がひとり、藤子のお家を訪ねて來て、

「お孃樣の事で存じ寄らぬ宜い話を聞きましたが、一つ御試しなすつたら如何で御座います。」

と言ひますから、どんな話かと聞いて見ると、かうなのです、兩親の住つて居る町から二里ばかり離れた處に、妙見山と云ふ深山があつて、そこへ昔から仙人が一人住つて居ります。ところが、此仙人と云ふのが不可思議な老人で、折々魔法のやうな事を使つて、人を驚せるのでした。併し、根が仙人丈に、正直で智識の深い事は古今無類。人の心を看破る時などは、丸でX光線でも使つて居るのではないかと思はれる位でして此仙人の前へ出ては、どんな惡人でも身慄ひせずには居られませんかつた。それ故、此邊の小供の中に、邪な子供や、心の賤しい子供やが產れると、直ぐにこの仙人の許へ連れて行き、拗けた心や惡い癖を直ほして

貰ふのが例になつて居りました。

右の次第を親切に注意して呉れますので、兩親は今更のやうに喜び勇み、

「それは妙だ。それへ氣が付かないとはホントに不覺でした。早速娘は仙人のところへ連れて參りませうよ」

「一時も早い方が宜しいですよ。善は急げと申しますから、寧そ今から出掛けやうではありませんか。」

母親は女丈に、娘の事は一倍餘計に心配します。これを聞くと、飛立やうにして、早や支度に取掛ると云ふ仕末に、父親も何時かそれに釣られて、到頭妙見山へと出立致しました。

道程はやつと二里と云ふ程ですから、左程に時間も取れず、正午頃出て、三時頃にはもう仙人の住居へ着きました。住居は山の谷合にあつて、眞に淋しい一つ家、夜になると狼や熊がのそ〳〵とやつて來さうな所です。何は兎もあれ、兩親は藤子の手を引いて、蔓草などが搦つた柴の折戸を這入つて行きますと、噂に違はず、四疊半位の薄暗い部屋の中央に、白髮の仙人が木像のやうに座つて居りました。父親は先づ恐る〳〵

手をついて、

「えゝ、私は……」

と自分の名前を通じ、それから靜々と今日登山した事の由を述べやうと致しましたが、仙人は手を振つて只うなづいて居りますので、

「はい？」

と差控へて仙人の樣子を覗ひました。すると、仙人は朗らかな聲を出し、

「名前は聞かずとも好い。又、お前さんのお頼みの筋もちやんと解つて居る。此娘さんは大分見榮坊で、嘘を吐く子だな」

と底光りのする眼をぎろ〳〵させて、三人の方を凝然と睨りました。何と云ふ恐ろしい眼付なのでせう。藤子を初め、兩親に於いても、何だか蛇にでも魅られたやうに覺えて、安い心は少しもありません。殊に、此方から云ふべき事の先は越すとは、何と云ふ不思議な眼識であらうと、思へば思ふ程氣味惡くなるのでした。

一體この仙人、どうして此娘の性質を知つて居るのでせう？、こゝらの様子を誰とても知つた人はありませんが、私の考へでは多分神様の力でも授つて居るので御座いませうよ。兎も角、この仙人にかゝつては、百里先きに居る人の心でも、直ぐに看破られてしまうと云ふ事でした。

藤子も斯うきつぱりと云はれて見ると、流石に恥しさと恐さとで胸一杯、萎返つて首垂れますと、

『いや、其様に恐る事はない。私が一つお前さんに呈るものがある。取つて置きなさい。』

云ひ〱戸棚から一個の指環を出して來ましたが、それには貴い金剛石が嵌込であるので、ぴか〱と傍に居るのも眩い程輝いて居ります。此指環を仙人がどうするかと見て居ますと、まづ藤子を膝元へ招寄せ、それから、左の手の紅差指へその指環を嵌めてやるのです。藤子は何か痛い目に逢ふ事であらうと泣顔作つて、胸をどき〱させて居ると、

『さあ、これで宜しい。』

と、物柔かに笑ひました。藤子はどんなに不審に思つたでせう。恐い目に逢はぬばかりか、金剛石入りの指環を貰ふなどゝは、全く思ひも寄らぬ事なので、何うしたものかと、只まち〱して居ります。仙人もそれを察したか、改めて兩親に向ひ、

『その指環は娘さんに上げます。御遠慮なくお歸りなさい。さすれば、間もなく悪い心は直はるで御座らう』

と、顔は恐いが、言葉は飽くまで優しいのです。兩親は不可思議とは思ひ乍ら、別に問返すのも無禮であらうと、早々この庵を出やうとしますと、

『あゝ、一寸御待ちなさい。娘さん。』

『はい、何か御用で御座いますか。』

『さうぢや、用と云ふのは、私が今から一年經つたらその指環を取返しに行く筈だから、其時まで指に嵌めて置いて決して抜いてはならぬ。宜いかな。その指環を抜取つたり何かすれば宜くないのぢや。』

と、丁寧に申渡しました。

其日は無事に家に歸り、翌朝早々に藤子は學校へ參

りましたが、左の紅差指には絶えず美しい光があるので、朋輩共は何かと思つて、藤子を四方八方から取捲くのでした。

「まあ、奇麗な金剛石！」

「何處で貰つて入らしつたの？」

など、口々に言寄るのでしたが、藤子は何だか眞實の事を答へるのが厭で、

「父樣に貰つてよ。今年のお年玉に。」

と申しました。すると、傍に居た一人が急に高い聲を出し、

「あら、美ちやん御覽よ。一寸。藤子さんの金剛石が光らなくなつてよ。」

そこで、藤子もその言葉に氣が付いて、指環に目を留めると、これはしたり、今迄ぴか〳〵輝いて居た金剛石が、丸で硝子の破片のやうに變つて居るではありませんか。藤子はもう眞靑な顏になり、

「あの……眞實は山の仙人から戴いたの。妙見山のねえ。」

と、途切れ〳〵に、斯う白狀しますと、不思議や指環には以前の光りが、さつとばかりに輝き渡りました。無論金剛石に戻つたのでせう。だが、藤子は今こゝでお友達へ眞實の事を告げたのが、何分にも口惜く思はれ、それから、自分の心の裡を看破られはすまいかと、懸念して朋輩を見ますと、皆な云ひ合したやうに高笑ひをして居ります。藤子はこの極り惡さを隱さうと思つて、

「何も笑はないだつて宜いぢやありませんか。あの仙人は此間妾達を連れて行くからつて、馬車で以てお迎へによこしてよ。お馬は六頭で、美しい飾物が澤山附いて居たの。そしてねえ。仙人のお家はすつかり水晶で出來て居てよ。妾は正直者だつてねえ。だもんだから此樣なのを呉れたのだわ。」

と、獨りで饒舌つて居りましたが、誰も眞面目で聞く者がないと見えて、きやつ〳〵と云ふ笑聲が致す計りでした。藤子は手持無沙汰で、何心なく左の手を擧げて見ると、今度は指環の光りには異狀がないけれど、

環の圍りが何間の間に延びたか、直徑三寸にも餘り、或は腕へも嵌りさうに大きくなつて居やうと云ふ奇妙な事なのです。藤子は此有樣をぎよつとして見詰て居りましたが、終には氣味惡くなり、今の話はほんの根無事であつた事を白狀しますと、指環は早速以前の可愛い形に戻り、藤子の紅差指は品よく似合ふやうになりました。朋輩の一人は近寄つて、

『藤子さん、仙人は何と云つて此指環を呉れたの？』

『えゝ、あの正直の御褒美だつて……』

と、藤子がまだ全く言切らぬうちに、指環は段々小さくなり、紅差指は丁度小刀か何かで斷切られるやうに引緊められるので、

『あ痛！痛！仙人はねえ。妾を見榮坊だと云つたの』

と、最早辛抱出來ず、大粒の涙をぽろ〳〵落して申しますると、不思議や指環は再び以前に復つて、やつと命拾ひをしたと思つたのは藤子でした。お友達も何となく氣が眞面目になり、殊に眞實に後悔して泣いて居る藤子を見た時は、流石に氣の毒だと云ふ心が、胸一

杯に湧上つて參りました。

到頭其日は家へ歸りましたが、それから後と云ふもの、藤子は生れ變つたやうな娘となり、つまらぬ見榮を張るために、苦しい嘘をつくなど云ふ事は、全く致さぬ事となりました。多分僞りを他人に告げると云ふ事は、惡い、そして愚かな事と悟つたので御座いませう。

『妾はもう決して見榮は張りますまい。』

と、自分で自分の心に誓ひましたが、丁度其後一年經つと、例の尊い仙人が約束通り藤子の家を訪れて、

『さあ、お前さんがさう改心して見ると、此指環の用事がなくなつた。私は今日これを貰つて行かう。そして、又他の娘にやる事としやう。』

とて、嫣然して歸路に就いたと云ふ事です。只今では此仙人の指環が何處にあるか、知つて居る人は御座いません。けれど、此樣な指環は私共に大禁物です。所在を知らずとも決して恥にはならぬと思ひます。

滑稽の研究

（某所クリスマス餘興席上）

中尾傘瀨

太古の人類は其思想を交換するに、專ら科話に據り、之を補くるに單純なる言語を以てしたものである。人智の啓發に伴つて、言語の數も増し、表情の術も進み、遂に文字を發明するに至つた。之も初は手にて書き、後は機械にて印刷し、今はタイプライタアをさへ使用する勢になつた。然らば將來は如何なる程度にまで進歩し行くか。余は想ふに、今より幾萬年の後、必ず言語も文字も、印刷術も、すべて無用に屬する時代が來るであらうと。それは如何にするか。即ち人間が自己の頭腦に於いて思想したる思想を、其儘直ちに何の手段にも依らず、他人に傳ふるのである。恰も今日の無線電信が、銅線なくして能く音波を傳ふるが如く、吾々は思想したる結果を、此の頭腦より彼の頭腦へ直ちに感せしめ得るのである。併し此時代は、迚も

五十年や七十年の諸君の呼吸のある中には現はれて來ないであらう。但、其時代には何ういふ人間がゐるだらうかといふ位のことは、諸君今之を知ることが出來るのである、例へば余の如き、唇の厚い人間は、正に其時代に生まるべき筈の者であつたので、此處に起つて諸君と相見ゆるのも、余自身より言へば、實に過つて此不便利極まる世に生まれ來合はしたもので、諸君の側より言へば、斯かる遠き後の世に生まるべき人間を、今目のあたり觀らるゝことは、非常なる幸で、今日のクリスマスと共に最も喜ぶべき大事實であると信ずる。又平生吶辯を耻ぢてゐらるゝ方も、此際大に力強く思召してよからうと存ずる。

次に先刻の餘興委員の口上に據れば、苟も「隱し藝」あるほどの者は、壇に上つて是非とも各々一藝を演ずべしとのことである。これは洵に無理な註文であるのみならず、又實に不法の要求である。斯くの如きは、我國家の政體と相容れざるものと思ふ。諸君！我邦は立憲政體で、吾々臣民の權利は、明かに憲法が保障し

てゐて與れる。權利とは、行爲と不行爲とに拘らず、各個人が任意に使用し得べき自由を指すので『隱し藝』も亦權利の主體たるべきものである。既に之を『隱し藝』と呼ぶのも、各個人が勝手に隱し得べき權利の範圍に屬するゆゑである。然るに之をしも、強ひて見せよと迫るは、畏くも我欽定憲法の精神を無視したものと謂はなければならぬ。此意味に於いて、余は『隱し藝』請求は、我國家の政體に副はざるものと難じたのである。

故に余は『隱し藝』あるも、然も澤山あるも——義太夫も、端唄も、都々一も、自身の機嫌さへよければ何でも行るけれども——わざと差控へて、意地惡く、『滑稽の研究』などゝ嚴しく出たのである。實をいへば、これも、一ツには些と眞面目に聽いて貰ひたいのと、二ツには孰うせ余が饒舌つたところ、必ず理に落ちるであらうと恐れたのとで、斯く冒頭で諸君の荒膽（も凄じいが）を拔いて置くのである。

さて滑稽の意義は如何。之が最も初に決せらるべき問題である。と斯ういふ調子で始める時には、余の話は徹頭徹尾澁面作つて聽かされるのでは無いか知らんとなつて來る。それで此問題は、話の進み行くに隨つて、おのづから判かることゝして、先づ滑稽の歴史から始めやう。

古より滑稽の發達したる順序を繹ねて、凡そ三期に分かつことが出來る。

第一期　身振の滑稽、即ち目の滑稽
上代の神樂、吉野の國栖舞、薩摩の隼人舞等之に屬す。

第一過渡時代
狂言、及びチャリ淨瑠璃等。茶番、俄も之より系統を引く。

第二期　言葉の滑稽、即ち耳の滑稽
落語（其内容は語呂合、地口、駄洒落、一口噺、三題噺等より成れる）之に屬す。

第二過渡時代
連歌、俳諧。其他狂歌、川柳、落首といふものも之に屬すべし。

第三期　眞正の滑稽、即ち心の滑稽
之れは未だ發達せず。從來の皮肉（諷刺）といふもの、之が萌芽たらむ歟。

さうして今日の滑稽は、第二期と第二過渡時代とを行きつ戻りつ、さ迷うてゐるものである。まだ眞正の滑稽、ユウモアといふほどのものは、全く發達してゐ

ないのである。僅かに過去に於いて、竹取物語、徒然草等に、其萌芽を認めることは出來るが、寧ろ俗語に皮肉といつたやうなものであつて、露骨に過ぎて温雅の質に乏しい。近頃夏目漱石君が「吾輩は猫である」を「ホトヽギス」誌上に續けてゐるが、あれがまア今後我邦に發達し行くべきユウモアの型となるのであらうかと思ふ。それで今日までは眞正の意味に於ける滑稽といふものは無かつたので、遺憾といへば遺憾であるが、又樂天觀を以つて言へば、將來大に發達すべき餘地を存してゐるので、我ユウモリストたらむとする者は、輝く希望に滿たされて進むべきである。

斯う論じて來ると、余の言は再び抽象的に流れて、笑はむと待ち構へてゐられる諸君に對し、誠に恐れ入らざるを得ぬ。茲に少しく諸君の頤を解かむが爲、過去と現在とに於ける滑稽の種類を擧げて、終りに余の滑稽に對する希望と意見とを述べたい。

第一期の身振の滑稽の例――

「古事記」神代卷を見ると、天照大神が御弟スサノヲ

の尊の無禮を怒られて、天の岩戸に隱れられしとき、天細女命が大神の不興を宥めむとして、日蔭の蘿を襷にして、天の正木を頭に戴き、笹葉を手に持ち、胸乳を露はし、裳紐を股に垂れて蹈られたところ、八百萬の神達がどツと笑はれたので、大神には何事の起こりしぞと、岩戸を少し開いて臠はしたまひし途端に、手力雄命が勢ひ込んで其戸を間け放たれた、といふ話の中にある天細女命の蹈は、即ち神樂の最も古きもので、確かに純なる身振の滑稽に屬すべきものと思ふ。後世――今日にても――何々神社の縁日祭日に二十五座の神樂、或は七十五座の神樂などゝ稱して、潮吹面、阿福面の道化た所作を行るのも、遠く其名殘を留めたものである。

又猿樂も、これより系統を引いたものである。

其他國栖舞は應神天皇の時に、初めて史に見えてゐるが、やはり道化た、變化の無い所作ばかりのものであつたらしい。隼人舞も、之を面白しと見た者の着眼點は、此國栖舞に似たものであつたらうと想像せられ

る。

第一過渡時代の滑稽の例――

此時代の大立者は、狂言である。茶番も俄も、まつた照葉狂言などゝいふものも、皆之から筋を引いたものであるが、下品で、淺薄で、露骨で、馬鹿氣て、御話になつたものでない。唯狂言ばかりは、昔の大名も能と共に樂んで見たといふだけに、流石によいものがある。其仕組を知る爲に、一ツ二ツを云ふならば、

『三人片輪』といふのは斯うである。某といふ者が仔細あつて、片輪者をあまた抱へやうとして、高札を打つて募集の旨を報らした。さうすると玆に博徒にして、常々目の鞘の外れたといはるゝ者と、足の達者なといはるゝ者と、口の利いたといはるゝ者との三人があつて、第一の者は座頭と化け、第二の者は躄と化け、第三の者は啞と化け、さて抱へて呉れと申し込んだ。そこで某は三人を抱へる約定にして、後の事、某は四五日餘處へ行くといふので、座頭にはかゝる物藏を預け、躄には錢藏を預け、啞には酒藏を預けて出て行つた。

三人の片輪は主人の去つた跡で、何うするかといふに先づ座頭が眼を開き、躄が足を伸ばし、啞が物を言ひ出すといふ始末で、三人顏を合はして見ると、皆共に識合ひの仲間であつたので、大笑になつて、それから三人が酒藏を開いて飲み、錢藏を開いて勝負をし、次にはかゝる物藏を開いて引き擔げ退くまいかと相談して今恰も飲みつ唄ひつ舞ひつ行つてゐるところへ、主人が歸つて來たので、三人大あわて、座頭が啞になり、躄が座頭になり、啞が物言ひ出してゐざるといふ騷ぎそこでやるまいぞ〳〵となるのである。

之に似たのは『俄道心』といふ狂言。やはり某といふ者が、料理人と出家とを抱へやうとして、例の高札を打つて廣告する。そこへ二三日前まで漁師を渡世としてゐたものが、俄道心になつて、案内を乞うて來る。又そこへ一人、近頃まで出家であつたものが、俄に還俗して、料理人に成らうとして行つて來る。主人は此兩人を抱へる。さて主人が云ふには、各々へ役を申し付けるから、出家は經を讀み、料理人は鱠を鱠に、鯛

を脊切にして燒物にせよと命じて、外へ出て行く。跡に兩人は主人の留守に互に稗性を語り合うて、窃に役目を替へて働かうといふ處へ、主人が歸つて來て見ると、出家が料理をするやら、料理人が經を讀むやら、トンチンカンの爲體。これにて化の皮があらはれて、やるまいぞ〳〵となる。

それから『岡太夫』の如き、『文藏』の如き、客になつて行つて先で振舞はれた御馳走を、何であつたか忘れたけれども、それが拵へて喰つてみたいといふので朗詠や、盛衰記の類を謠はして、其文句によつて思ひ出すといふ趣向。これは下手に遣れば、まるでをかしみを無くして仕舞ふと思ふ。其他『六地藏』『瓜盜人』の如き、人間が地藏や案内子に代つて人を欺くといふ苦しいをかしみ。又『金岡』と『墨塗女』とは、事は變はれど顏を塗つた所に腹を抱へるといふ隨分罪の無いをかしみ。唯一つ狂言中甚だ趣のかはつたと思はれるのは『土產鏡』で、都から歸つた夫に鏡を貰つた妻が、其鏡に已の顏の映るを見て、忽ち嫉妬の形相を現

はし、我夫は都にゐて情婦を蓄へてゐたに相違ないと怒る仕組。狂言といふよりも、何となく神話めいて、古雅な味がある。この趣向は狂言でなく、何か別な眞面目なものに用ゐたらば一層よいかとも思ふ。

すべて斯ういふ風に、失策、ド忘れ、感違ひ、早合點、淺智慧、わざと底を見せた計略などが、其滑稽要素となつてゐた。尤もこれは狂言に限らず、後の落語にしても同じ筋を辿つてゐるので。

第二期の言葉の滑稽の例――

此時代の滑稽に屬する落語といふものは、內容を分拆すれば、つまり語呂合や、地口、駄洒落、一口噺等が寄つて蒐つて、不自然に繫ぎ合はされたものに過ぎぬ。それで其仕組といふものは、狂言よりも今一層簡潔に、緊切になつて、失策や矛盾や、鉢合の外に、頓智、機才などが、其材料骨子に加はつて來た。

近頃和田垣博士が、さる所のハイカラ紳士會に臨んでの話がある。其中の一人が『今日世界で最も男らしい帝王は誰であらうか』といひ出した。或者は、それ

は勿論獨逸のカイザルであるといツた。或者は、否亞米利加のルウズベルトであるといツた。其時博士は、いと靜かに『僕は露西亞の天子であると思ふ』といツた。此意外なる言に、皆が、それは何ういふわけかと尋ねた。博士は愈々落ち付き拂ッて、『露西亞の天子はどオトクラシイ Autocracy なものは無からうでないか』と答へたといふ。これは駄洒落である。此式のをかしみは竹取以來、其角の虛栗集に『木枯の身は竹齋に似たるかな』と歌はれた竹齋、膝栗毛の一九、浮世風呂浮世床の三馬輩に至るまで、盛んに慣用したものである。

序に一九の駄洒落を一ツ披かう。赤坂並木で小坊主の德利提げたを見て、狐の化けたのだと思ひ込み、彌次郎兵衛が天秤棒で打ちのめした所が、眞實の人間の子供で、泣き立てたので、親父が驅け出して來て『折角買ひに遣ッた五合の酒まで雫も殘さず溢して仕舞ひ小さい者をひどいめに逢はしたな』と詰め付けた。彌次郎兵衛平伏して『五合の酒が溢れたとは五合同斷、

お氣の毒に存じます。代は私が出しますから、一升のお願ひ、かん二升と仰ッて下さりませ。乾度お禮に三升致しますから、四升言はずと御了簡、五升でござります』と詫びスッた。これは宛然語呂合の重なッたやうなものである。

又一口噺といふものは取留の無いもので。――些と魯しき或若者が、親類の婚禮に招かれたので、俄に『高砂』の謠を習ひ覺え、やがて友人に伴はれて行く段になッて、其友人が注意していふには、謠を謠ひ出すにも時があるから、私が貴公の袖をそッと引いたならば謠ひ出す。又御馳走の後お湯でも呑むとき、熱ければふう〳〵と吹かす、澤庵切で靜かに攪き廻すのであると敎へた。それから二人は多少の道程のある件の親類に赴いた。間もなく親類の家に着いたので、先づ玄關に腰をおろして草鞋を脫ぎ、洗足の湯を取ッて貰ッた。所が其湯が餘りに熱かッたので、若者は恭しく『どうぞお漬物を一截下さい』といひ出した。傍の友人は、是は飛んでもないことをと思ッて、あわてゝ袖を引き

止めた。さうすると若者は、此時こそといふ顔付で、聲も朗らかに「高砂や」と呻り出した。まア斯ういふたぐひである。洵に罪のないといへば罪の無い、淺いといへば淺い、しかも馬鹿氣た話である。

第二過渡時代の滑稽の例――

宗鑑の『犬筑波』や、貞德の『御傘』が、此時代の滑稽の好い見本であるが、一寸見た所、耳だけにては通じにくいものが多いから、他の方面から拔く。狂言の『富士松』に出てゐるが、殿『奥山に船漕ぐ音の聞こゆるは』太郎冠者『四方の木の實やうみわたるらむ』尙『箕被ぎ』『連歌盜人』にも此例がある。

これは他の隨筆にある話――都に名高き天文博士の妻が、叡山の朝日の阿闍梨といふ者と慇懃を通じてゐた。或日天文博士には所用あッて外出したる所、妻は好き機なりとして、直ちに例の阿闍梨を招き入れて樂んでゐた。そこへ俄に博士が立ち戻ッて來たので、阿闍梨は大に驚いて、西の窓より逃げ出さうとあわてた。其時博士『あやしくも西に朝日の出づるかな。』阿闍梨

答へて『天文博士いかに見るらむ。』これで姦通罪も、本夫の前に許されて、更に酒酌み交はしたといふ不體裁な話。至ッて上品ならぬ例で、洵に恐れ入ります。

尙俳諧でいへば、檀林の句になか〳〵澤山、此時代の滑稽趣味があらはれてゐるものがある。宗因の

やがて見よ、棒くらはせむ蕎麥の花。
唐辛、羽根が生へたら赤とんぼ。
松に蔦、蛸木に登るけしきあり。

天明に至ッても、蕪村の

學問は尻から拔ける螢かな。
春の海ひねもすのたり〳〵かな。

のたり〳〵は、卽ち言葉のをかしみである。

明治になッてからも、故綠雨の

月落烏啼霜滿天寒さ哉。

の如きものがある。これは故紅葉の『海棠や漢皇重色懷傾國』の句を諷刺したものであるが、いひまはしに滑稽の趣味が含まれてゐる。

總じて第二過渡時代の滑稽の趣味は、よほど高尙に

趣いてゐるには違ないが、併し俳諧だけは芭蕉の幽玄風が流行して、大に當初の滑稽趣味を奪ひ去ッたわけである。これは議論が岐路に入るから多く言はぬが、文藝全般の上より見れば喜ぶべき現象であッたらうが、單に俳諧を滑稽文學として發達せしめんとしたものに取ッては、遺憾のきはみであッたらうと思ふ。

又狂歌には蜀山、眞顔、岡持、飯盛等、天明明和の時代は、隨分盛んなことであッた。併し皆野卑で、淺近であッたといふことは、免れない批評である。かの『酒呑めば何時も心は春めきて借金取も鶯の聲』といふやうな太平樂を列べたものか、『時鳥鳴きつる方を酔うてみれば、幾つも數が有明の月』といッたやうな調戯たものであッた。尚蜀山のを一ッ二ッいへば、かの樂翁公を譏ッたといふので名高い『世の中にかほどうるさきものは無し、ぶん〳〵と夜も寢られず』を始めとして其他『山吹のはなかみばかり金入に、みの一ッだに無きぞ悲しき』『生酔の禮者を見れば大道を横筋かひに春は來にけり』といふやうな調子のものであつた。飯盛のには『歌よみは下手こそよけれ、天地の動き出してたまるものかは。』木端のには『世の中は何のへちまと思へども、ぶらりとしては暮らされもせず』今のヘナブリも追々よくなるであらう。

川柳。『賣りする名と唐様で書く三代目』の機警もあり。よいのはよいが、惡いのになると、ひどく下品でたまらぬ。今の新川柳、風俗詩と名づくるものには、琢いて來たもののもあるが、まだ文藝上の高い價値は附けられぬ。

第三期の眞正の滑稽の例――

この例は、まづ無いと申しましやう。唯纔かに之に近いものは、徒然草に、西大寺の靜然上人といふが、腰屈まり眉白く、誠に德たけたる有樣に見えたので、西園寺内大臣が『あな尊とのけしきや』と感嘆したのを、日野資朝卿といふが聞いて、然らばとて、尨犬の瘠さらぼひて骨も露なるを牽かせてやつて『これは如何ですか』と伺はせたといふ話。これは皮肉といふもので、あんまり露骨に過ぎた諷刺である。

今一つ同書に。仁和寺の法師共が童兒の出家するを祝すとて、酒呑んで醉ひ痴れ騒いだ揚句、一人の法師は興に乗じて、足鼎を取つて、倒に冠つて踊つたはよいが、それを脱がうとした所が、何うしても抜けない。さあ一座大心配が始まつて、歡樂極まつて哀情生ずといふ始末。とう〳〵京の醫師まで駈け附けて、脱がして貰つたが、鼻缺け耳缺け、無様な面になつたといふ話。諷刺の意味は豐かであるが、些と興のさめた滑稽である。

其他詮索すれば、古い所では『今昔』『著聞』、新しい所では平賀源内の作などにも、こんな例はあらうと思ふけれども、到底ユウモアといふ所までは進んでゐぬ。

最後に今一例を舉げる。西鶴の『名殘の友』に、山名外見といふ劍術師が、宇治川の出水の時、見物に行つてゐて、昔佐々木梶原は此川を横斷つたといふので今に評判を殘してゐるが、已も一番渡つてみやうといつて、傍の人々の制めるをも構はず、馬に騎つて浮きつ沈みつ、彼方の岸に上つて、鼻高々と誇つてゐると

其處にゐた老婆さんが、昔佐々木梶原の渡つた時分には、此方に澤山弓矢を持つた鎧武者が控へてゐましたよといつた。此話は日外『國民』の日曜講壇にも披いてあツたが、あれは二人の武士が宇治川の橋の畔で立話をしてゐる所にしてあつて、互にこれほどの川を渡つた所で、何の佐々木梶原が手柄なものかと語り合つてゐると、茶店の老婆さんが云々といつたとしてあつたと思ふ。蘇峯生は何から引用したか知らぬが、恐らく此『名殘の友』のと出所を同うするものであらう。それはとにかく、此話には確かに多少のユウモアがあると思ふ。どうか斯ういふ例で、露骨に過ぎず、意味の深長なるものを願はしい。

其他心學道話、御伽噺等にも、全くユウモアの分子が無いといふではないが、多く陳套で、平凡で、幼稚で、これはといふものがない。

結論

最早結論を急がう。

それで余の意見としては、滑稽は三個の要素、

婉曲なる諷刺、
快活なる趣味、
斬新なる意匠、

を備へねばならぬ。而して之を統ぶるに、即ち全體としてそれが

自然的整齊

を有たねばならぬを主張する。

少しく前條を説明すれば、

諷刺の婉曲とは、上品で、高尚で、深みがあつて、雅馴でなければならぬをいふ。若し之に反して、露骨、淺膚、野鄙であつたならば、其滑稽は其場限りの輕い一笑に濟んで仕舞ふ。

趣味の快活とは、始終いき〳〵とした、心から笑へる面白みであつて、決して人をして沈鬱ならしむるやうな、悲み泣かしむるやうなものではならぬをいふ。併し『泣き笑』のたぐひは却つて大に可い。

意匠の斬新とは、滑稽は陳套平凡であつては價値がない。常に清鮮にして、破天荒の落想に基かねばならぬをいふ。

さうしてそれが組立に於いて、全然合理的でなくとも、必ず自然的に纏められなくてはならぬをいふ。

かくてこそ玆に初めて深きをかしみある、味ふべき餘地ある滑稽ユウモアが生まれ來たるのである。大國民といふものは、怒れば眞に怒り、泣けば眞に泣き、笑へば眞に笑ひたいものである。我邦の諺にも、鬼の眼に涙といつて、涙の無い人間は鬼に喩へられ、腋の下を擽られても、をかしがらぬ者は間男の子だと罵られるが、カアライルは、笑はぬ人間は謀叛人だといつてゐる。どうか諸君、間男の子だの、謀叛人だのと滑稽にもならぬ笑を買はれないやうに御勸め致します。

（終）

餘瀬生曰、此腹案甚だ粗笨、他日再考、大に修正すべし。

ある朝、町を通つたら、ある家の前で、鶏がさもノンキさうにコケコッコーと鳴いてゐた。其家の屋根看板を見たら「鶏肉スープ」と書いてあつたので、予は覺えず冷汗が出るやうな氣持がした。（照）

火の中に住むの記

「北海道の冬の生活」面白く拜見しました。一々實際で、小生のやうな、多年同地に暮らしたものに在つては、その昔を偲ぶ誠によい讀物であります。唯今小生が昨年米國のフレスノに居たときものした夏の暑さの記事を差上げますから、御差支がなかつたら、御載せ下さい。氷心の牡丹餅、水晶のやうな御飯、夜具の襟の降霜などに對して、此の暑い〳〵實況は、丁度よい反映かと思ひます。

竹内余所次郎

恐ろしい夏が來た。恐ろしい夏が來た。噂さに聞いて居たフレスノの猛烈な夏が來た。日光はカン〳〵と殆んど直線に照り付ける。都てのものは干物になりさうに思はれる。道路は丸で灰のやうで、家から外へ出ると、火の中へ飛び込むやうな氣持がする、土から反射する日の熱が、顔へ當つてチク〳〵刺戟するのだもの。夫れも其の筈、きのふけふ寒暖計は處によつては、室内でも百十度から百二十度の間に上る。イヤ暑いの暑くないのゝ段ではない、唯もうぶつたまげるばかりだ。氷點下何度にか冷えたアイスクリームでも、口へ入れると直ぐにもう蒸氣になつて、皮膚から出てゆくかと思ふ位で湯水を飲めば勿論汗は出るが、逸早く其の汗も蒸發して仕舞

ふ。日向をあるくときには、イッソ厚い服がよい、薄いものでは、日を通して却つて惡い。蝙蝠傘をさす人が少い、日は上から照るよりも、下から反射する方が力が強くて、苦しさが烈しいから。水道の水はお湯のやうで、顔や手足を洗つても涼しくも何んともない、夫れでも一日に五六遍もからだを拭いてをる、拭かねばどうも心持がわるくて仕樣がない。室の中の品にさはると燒いた樣にあつい、着物をきると丁度火燵にあぶつたやうになつてをる、不愉快甚だしい。

二階の室など迚も居られるものぢやない。先月は午前は二階午後は下といふ規則にして居つたが、此度は此月に入つてからは、二階から一足とびにダウンセラー(地窖)へ逃げ込む次第だ。この一週間、一日は一日と暑くなつて來る。「ヤア今日は又昨日よりは暑いぢやないか」といふのが、毎日出ツくわしたときのおきまり文句になつて仕舞つた。始めに涼しかつた地窖が、此頃では大分あつくなりかけて來た。實際雨も降らず、露も下り

ず、涼しい風も吹かず、只もう照りつけて〳〵、短い夜間だけ夫れを休んで、朝から又照りつけるのだから一日〳〵と熱を地面に貯へて、暑さの勝りゆくは當然の譯だ。

聞けば十數年來ない暑氣で、二十年も此地に居る人でも、コンナ事は二度目位だと話してるさうだ。昨年など勿論コンナに暑くなかつたと皆が云つて居る。此間中は夜十時十一時にもなれば、室も少しく涼しくなつて、ベッドに寐轉んでも心持よかつたが、七日の夜からは、ベッドがやけ込んで居て迚も寐られぬ、分けて八日の土曜など、夕方より西風が吹いて來て、室外では心持が少しくよいけれど、到底寐床に這入られぬ。一度寐て見たが苦しくて飛び出して、庭園の樹下の涼臺の上に、某々諸氏と同じく星空を眺めながら寐た。風が止むと、蚊が遣つて來て螫すので安眠も出來ぬ。四時頃には少しく冷氣を覺えたので、室へ歸つて寐たといふやうな騷ぎで、生れて初めてコンナ目に逢つた實に有り難い事だ。『やア嚴しいあつさだ』『ドーデス此の暑さは』『ヒドイちやないか』『お慣れにならぬと一層苦しいです』など云ふのが此頃の挨拶である。之で空氣が濕つて居らうものなら、一層苦しいが、空氣の乾燥も亦甚だしい。物の乾く爲めに火災は頗る多い。氷、アイスクリームなど日本の八九十度の氣候の處よりも融けにくい。是は大氣の乾いて居て、熱の傳導が遲いからである。扇子や團扇が餘り役に立たぬ、空氣が熱して居るので、暑い風の來るのと、乾いて傳熱性が少ないのとで、サッパリ涼しくないからであるが、其の代り烈しき風を起す電氣扇は、隨分廣く用ゐられて居る。今日までのフレスノの夏を觀察して暑さの紀念の爲めに火の中に住むの記を作り置くこと斯の如し。

（七月十日記）

春の料理

割烹學校創立者　石井泰次郎（投）

◎題目　酢の物

◎食品　ひらめと花菜のからし酢みそ

◎原料　▲ひらめ（中物）片身▲花菜五箇▲味噌卅匁餘▲砂糖十二匁▲味淋三勺▲水三勺▲酢二匁▲からし三匁

◎ひらめの作り方　先づひらめを洗ひ、刺身庖丁で皮の固き所をへぎ取り、出刄庖丁で眞ん中の所へ竪にズッと切れ目を入れ、其處から左右へすきおろせば、丁度、表裏の肉と中骨との五つになる。其の肉の二片を以て刺身を作るのであります。其の作り樣は、先づ尾の方を右にし、皮を俎につけて、左の手にて右の端を持ち上げながら、右手の庖丁で皮をすき取るのであります。それから肉の厚い方を向ふにして刺身に作る。庖刀を持つ右手の小指に力を入れ、向ふの方より前の方へズッと庖刀を引き、一片切つては板をズラして、右の方へだん〳〵に重ねかけて置く。

◎花菜　は長四寸ばかりのものを取り、上皮を一重のぞきて水にて洗ひ、攝氏八十度位ゐの湯鍋に入れて、八分間湯煮し、直に笊に取上げ、團扇で扇いで急に冷せば可いのであります。（此の如く、水に取らずに、直ちに上げる事を『生あげ』と申します）

◎からし酢みそ　味噌を直に裏ごしして鍋に入れ、砂糖、水、味淋を加へて炭火にかけ、よく煉りて（あまり煉りつめずに、杓子にすくつて落して見て、一所から垂れ下る程が可し）其中へ酢を加へて、かきまはし、解きたる芥子を入れて、よく交せ、鍋をおろす。

からしは、深き猪口に入れ、水で解き、それに紙をかぶせ入れ、其紙の上から赤く熾つた炭火を二つ三つ入れ（一つ一つにジユーと云はせて）それを取り去り、猪口を伏せて置き、暫らくして紙を取り去り、鍋にはさみ入れて交せるのであります。

◎出來上り．さて皿に味噌を敷き、其上に、花菜を向ふに、ひらめを手前にと盛つて出すのであります。

●酢や其他の酸味ある食品に熱を加ふる時、瀬戸引鍋を使つてはならぬ。醋酸鉛といふ毒藥になる虞があるから。

婦人と園藝

久田二葉

野卑な嗜好を斥けて、高尙多趣味な嗜好に向ふのは進歩向上の途にある私共の生涯に免れぬことであります。さらば如何なる嗜好が高尙であり、また多趣味にして優美でせうか。

なるほど詩文や、書畫や、音樂や、茶の湯や活花などは世に云ふ所の、高尙優美なものでせうが、どれも其中に野卑なもの氣に喰はぬところもあり、また自ら時勢や各自の家庭に合はぬものもあり、また特に婦人の新嗜好として、室内室外を兼ぬるには、今一歩欠けて居るところはありますまいか。

尤も室外の樂みとしては、郊外散策を初め種々の遊戯はありますれど、これも時と所とによッて、思ふやうに行かぬことがあります。それで若し御婦人方が、その纎弱い手で、自ら果樹を育て、野菜を植ゑ、花を作られたら如何でせうか、抑も之等植物を育てますのは、ちやうど小供を育てると同じで、育てるものの丹誠は早速現はれるのであります。そうして蒔いた種子は生え追々生成して花が咲き、實を結ぶまでの間、寒

暖の變もあり、乾濕の差もあり、肥料耕耘の加減もありまして、喜ぶべきこと、氣遣ふべきこと、惜むべきこと、笑ふべきことなど、千變萬化の出來事、それが如何に樂しく興多きことでせうか。

それで若し斯樣な種々の出來事のあッた時、不適當な操作や手入をするか、或は懶けて居りますと、報いは直ぐ不結果となつて現はれること、まるで人の鏡のやう、寸分欺くことは出來ませぬ。こう思ひつきますと、花卉蔬菜既に婦人の好伴侶で、我彼を欺くべからず彼また我を欺かざる潔白無二の間柄、そうして友既に斯の如くですから、どうして其教訓感化を受けずに居られませう、自然に氣品を高め人格を養はずには居られませぬ。隨つて園内にある間は、良友の寛懷、自然大慈の懷にあるので、恍惚として浮世を忘れ、陶然として興趣の盡きる所はありませぬ。

若し之に一歩を進めて、研究的にやつたら如何でせうか、必ずや興味は一層加はつて來るに相違ありませぬ。先づ種子を採るに注意した結果として、種々の變化が花卉形態の上に顯はれて來ます。紅い花を白くすることが出來、一重を八重にすることも出來、なほ葉に於ても莖に於ても實に於ても種々の變化を誘ひ出す

ことが出來ます。彼の菊の花も林檎の實も、皆な斯様にして育てられた結果であります。なほまた挿木接木のこと、土壤肥料のことなども皆斯様な關係を持つて居ることを思ひ、少し研究的の眼孔を向ければ、這の間自ら清趣の湧くを覺えるに至るのであります。

園藝は婦人の仕事に適して居て、而も高尚だといふところから、歐米でも女子に適當な娯樂の一に數えられ、特に婦人用の器具を製造せられてあります。そうして園藝學校なども男子部と女子部とがあり、花壇の趣向や操作には何時も女子部が優等だとさえ申します然るに日本では從來園藝の嗜みは、主に男子でありまして、婦人は人の育てた花を愛するに止まり、未だ園藝の情趣に與らなかッたのは少なからぬ損でありました。で、これからは是非とも此趣味を養成したいと思ひます。殊に病弱の婦人方などは、庭園廣き住居を撰ばれ、四季とり〳〵の花の培養、場所が許せば菜果をも試みられたなら、何よりの樂みで、精神上肉體上に感受される趣味と利益は多大なものでせうと思ふ。

火州庵小信

まがりかわ生

◎前號には、堺兄の炬燵雜談に『エスペラント』語のことが出て居たが、僕は年末年始にかけ、二週間計り風邪で寢たので、岡山のエスペラント通信教授に入會するの機會を失つて仕舞つた。それは十一月頃、大杉君からエスペラント語の書物を借讀して、成程之れは簡便なものだと感心した矢先きに「さあ岡山に通信教授が開けた、堺兄も僕も入會した、君も入會し玉へ」との同君の勸めを受けたので、それでは年末になつたら申込をしようと約した。ところが、とうとう念入りの風邪で、咽喉が腫れて、食物も通らぬ有樣、エスペラント語も何もなかつたのであつた。

◎其代り一月の五六日頃から、病氣も少しづゝよくなるにつけて、病中無聊の苦し紛れに、種々羅馬字の書方について工夫し、それを、枕頭で以て書き初めた。最初一息に五六十枚書いて見たが前後の矛盾の夥しいのに氣付いてすつかり一旦捨てゝ仕舞つた、が又も別の工夫をして、今度は二十枚計りのものにした。臥しては考へ考へては書き、書いて疲れて又横になる、と

云ふ具合式で、書き改め〳〵漸く之れなら「用をなすだらうと云ふ處まで漕付けた。伊太利語も獨逸語も西班牙語もエスペラント語も、勿論英語も國語も皆その書き方を參酌した。（誤解する勿れ、予は此等の外國語に決して些かも通じて居るのではない。八九ヶ國の國語を毎日〳〵見慣れ聞き慣れる便利の塲所に居るので上皮計り鼠嚙ぢりに嚙ぢつた計り）。

◎試に尾崎紅葉の「二人女房」が机上にあつたのを二三頁新式新流新工夫の書き方で以て寫して見た。寫したものを讀んでも見た。どうやら之れなら「もの」になつたやうだ、と思ふとすぐ、僕は由分社に行つて、羅馬字折捌塀兒は旅行中の不在で、深尾君に會つて、羅馬字雜誌を一寸見せて貰つた。が、どうもざつと見たのでは諸名士の流義が分らぬので、一日大橋圖書館に行つて、既刊三冊を借り受け、ゆつくり、深柳氏、渡邊氏、平非氏、巖谷氏等其他諸先輩の流義を拜見した。又更に三十四年頃文部省で取調べられた諸博士諸名士の羅馬字書方報告書をも拜見した。

◎有體に云へば諸先輩のを拜見した後も、自分の工夫を根本から棄てようとまでの考へが起らなんだ。却て塀兒の所謂『綴方の生存競爭が起る』其中に、自分のも一つ投げ出して自然の陶汰に任せて見ようと決心した。と、かう露骨に云つて仕舞つては、餘り不遜に陷るから、予は自分の工夫を發表して「諸先輩の參考に供しよう」と考へたのだ。しかし、從來の普通の羅馬字の綴方書方に對して、大膽な法外の改革をやつたのであるから、念の爲め、さる宴會の席で、專門家の某文學博士に此等の諸點を話して「かう云ふ僕の考へですが、どうでせう」と相談したれば、其等の點には悉く賛成の意を表されて「一應その書いたものを見せて下さい」と云はれたので、今僕の原稿は右の博士に渡してある。

◎羅馬字のことは、これでやめて、今一ツ。之れは御婦人方の御一考を煩はしたき事。餘の儀でもないが、一昨年頃から、電車の客は老幼と婦人とに席を讓るといふ美風が盛んになつて、喜ばしきことだと、世間一般の話しであつた。實際人込みの節は、壯き男子が老者幼者婦人と見れば、すぐ立つて席を讓るに躊躇しないと云ふ有樣を、僕も常に實見して居る。が近來は女學生（計りでなく若き婦人）には以前の如く快よく進んで席を讓らなくなつたと云ふ話だ。なぜかと聞いて見ると、說明者の曰ふには、以前は席を讓られたものは

「どうも濟みません」とか「お氣の毒さまとか「ありがたう」とか一言の挨拶をしたものだが、近來女學生などは、弱者に對する男子の同情に慣れ、付け上がつたせいでもあらうか、此等男子の行爲をば當然のことだと心得、一應の挨拶もなく、讓られた席に着いて平氣なものが多い。それで自然一種の反感を買つて、今日では女學生が車中に立て居ても、誰れも席を讓らうとしないのだとの事。

◎勿論、皆ながそうと云ふ譯ではあるまいが、若し果して此樣な傾きがあるとすれは、甚だ好ましからぬ現象ではないか。席を讓る男子の心に一應の挨拶を希ふと云ふのならば、それは甚だ狹い心で、寧ろ頗る面白くない話しだが、それでも讓られた方で之を「當然の權利だ」と計りで、一應の挨拶をもしないと云ふは、ちと通りかぬる考へかと思はれる。それが爲め男子の反感を買つたとあつては、之を只男子の心が狹いのだとのみ攻擊する譯には參るまい。「電車の中の席を讓る位の些細な事に、婦女子から是非一言の禮を要求すると云ふ如き男子なら、もう敢て席を讓つて欲しくはない」と云つて仕舞へば花も實もない、それつきりのことだが、苟も人間が典雅な態度を失はずに、互に溫情を交換して行くべきものであるならば、婦人の愛嬌としても、ツイ一言の挨拶位は出るべき筈と考へる。但し僕は極めて謙遜に、御婦人方に御相談をするので、敢て挨拶なきに憤りて「席を讓らぬ」心狹き男子をよしと思ふからではない。（一月十四日記）

●良妻賢母主義

堺利彦

◎今の女子教育の目的は良妻賢母を作るに在りといふ、……これ女子を家庭に押籠むるの主義である。女子を以て男子國の奴婢とするの主義である。

◎彼等は曰く、社會百般の事業は男子之に當る。女子は單だ家庭に在りて夫に仕へ、子を產み子を育つれば善いのである。男子は外に働き、女子は內を守る、是れ男女自然の別であると。

◎嗚呼是が果して「自然の別」であるか。果して男女心身本質上の差異であるか。……予輩は、男女心身の本質に大小、高下、强弱の差異があるとは信じ得ぬ。されば現時の男女間に於ける著大の差異は、決して人類本來の「自然の別」ではなく、寧ろ不自然なる近代的の現象と云はねばならぬ。

◎但し、男女が其の生殖作用に於て自然固有の別を爲せるは、一見明白の事實である……女子は多く生殖作用を營むの任務に當るが故に、男子は多く衣食住を營むの任務に當る事となつた。男女の分業は斯の如くして起つた。

◎此の男女間の分業は、將來と雖も猶ほ必ず存すべき筈である。然しながら人生の事業は決して衣食住と生殖作用とばかりでは無い。人生が此の二者以上に出でたのが即ち文明である。されば文明の社會に於ては、衣食住以上、生殖作用以上、男女とも各々その才能に從つて高尚の事業に當るべき筈である……

◎然るに「社會百般の事業は男子之に當る」と云ひ、「女子は單だ家庭に在りて夫に仕へ、子を產み子を育つれば可い」と云ふのは、即ち女子を家庭に押籠めて男子の奴婢とする主義である。良妻賢母主義とは即ち男子國の奴婢養成法である。（二六新聞所載「婦人問題」中より抄錄）

炬燵雜談

金澤市に於て　堺利彦

◎●●●●● 旅行の利益　僕は去年の暮から加賀の金澤の親戚の家に來て滯在して居る。實は東京の年末年始を避けて『婦人新論』の著述に從事して居るのである。金澤と云へば此國の大都會で、其の雪景及び雪生活の有樣が、嘸面白からうと想像して居たが、生憎今年は雪が少くて、十分に其の趣きを見る事の出來ぬのは、多少の遺憾であるが、然し珍らしい土地に來て色々珍らしい事物を見聞して、大ぶん學問が出來た樣な心地がする。成らう事なら一年に一度や二度、何人も必ず旅行をする事にしたいものだ。旅行せぬ人は溜水の樣なもので兎もすれば腐りやすい。ちよい〱と旅行をして、心に變化を與へ、刺激を與ふれば、思想の水、感情の泉が、常に清新の氣を帶びて居る。

◎●●●●● 宿屋と我家　金澤に居て『炬燵雜談』を書くのは最も其實を得て居る。金澤の家には必ず炬燵がある。座敷にもある、茶の間にもある。僕は一日草鞋がけで鶴來といふ處まで遠足を試み、一晩そこの宿屋に泊つたが宿屋の座敷にも矢張り炬燵がある。同行三人、宿屋の座敷にズウッと通つて、其まゝ炬燵にあたつて話をするといふ樣な光景は、僕等には甚だ珍らしく感ぜられる。何だか斯う我家に歸つた樣な氣がして大變に愉快であつた。若し到る處に公立の宿屋があつて、旅行者は何人でも自由にそこに休息し、宿泊し、滯在する事が出來て、今の宿屋の樣に金を拂ふ事も入らず、人の家に行つた樣に遠慮をする事も入らず、總ての旅行者が總ての宿屋を我家の如く思ふといふ世の中になつたらば、如何に愉快な事であらうよ。

◎●●● 能樂見物　或日金澤名物の能樂を見に行つた。寶生流の正統は此地にのみ殘つて居るとやらで、中々立派なものであつた。能は田村と羽衣と鉢の木とで、素人の僕には評し樣もないが、狂言の面白かつたのを一ッ話して見よう。

◎●●●狂言『釣針』『是は此のあたりの者で御座る。某いまだ定まつたる妻が無いに依つて、蛭子の神に祈願を掛け、善い妻を得ようと存ずる』といふ樣な譯で、或大名が太郎冠者と二人で蛭子の社に參籠をする。すると蛭子樣の事だから夢のお告を以て釣竿を賜はり、之を以て妻を釣れとの事である。大名大きに喜び太郎冠者に妻を釣れと命ずる。冠者は釣竿を持つて舞ひながら、『釣らうよ、釣らうよ、奥樣を釣らうよ、ミメの善いを釣らうよ、十七八を釣らうよ』と繰返して云ふ。すると花道の方から被衣を被つた女が出て來る。兩人大喜びで座に招ずる。それから冠者は又『釣らうよ、釣らうよ、お腰元を釣らうよ、四五人も釣らうよ』と舞ふ。すると同じく被衣姿の腰元が四五人出て來る。次に冠者は又、主の勸めに依り『釣らうよ、釣らうよ、己が嫁を釣らうよ、ミメの善いを釣らうよ』と舞ふ。又々被衣姿の女が一人出て來る。主從大恐悅で『イヤお芽出度い事で御座います』『誠に芽出度い事でおじやる』『ハツハヽヽハツハヽヽヽヽ』と云ふ樣な事で、そ

れから大名は被衣のまゝの奥樣と腰元とを連れて奥にはいる。跡に太郎冠者、被衣の外より己が妻を窺く樣にしながら『ハツハヽヽヽ、有難い事かな。そなたと私とは蛭子三郎殿の御引合せに依つて、こうして夫婦になるからは、五百八十年、萬々年まで別れる事ぢや無いわい。サア／＼其の被衣を取つて早う顏を見せておくりやれ』と云ふ。被衣は頸を左右に振る。『ナニいや？耻かしい？ハツハヽヽ、今更耻かしい事があつたものでない。どれ／＼それでは私が其の被衣を取つてやらう』と、冠者は花嫁の被衣を取る。被衣を取られた花嫁は色黑々の大お多福。冠者はビツクリ仰天し、眉を顰めて逃げ出だす。お多福殿は追ひすがる。それでお仕舞。

◎●●●家庭の厚氷　金澤は右の如く能樂なんどが盛んで、頗る古風な、悠長な所があるが、其の代り家庭の有樣を聞くと實に驚くばかりの事がある。嫁姑の關係が殊にやかましく、即ち姑の權力が非常に強くて、お嫁さんは御飯が二膳のものと極つて居て、たまの里がへり

の時、纔かに平生の饑を醫すといふ様な話がある。それで離婚は寧ろ通常の事として少しも珍らしがられず「男には添つて見よ」といふから、マア試しに行つて見るが善いといふ様な次第で、婚姻が一度で濟むものとは初から考へられて居らぬ。尤も金澤にも隨分ハイカラの當世風の細君をも見かけるが、喩へて見れば、日あたりの善い表の庭には梅の花がモウ二三輪咲きそめて居るのに、始終日かげの裏庭には厚氷が張りつめて居るといふ様なものであらう。此の厚氷を打破り、此の厚氷を解かすのが、即ち我々の任務であるのだ。

◎嫁さんの盗み食　姑にいびりだされた或る婦人の懺悔話に「お恥かしい事ですけれど、食べ物の慾はど汚いものは御座いませぬ。お菜は固より、御飯も思ふ様には戴かれず、間の物などは思ひも寄らずといふ有様ですと、絶えず食べたい〳〵の一念で、ツイこつそりと盗み食ひもする様な事になるので御座います。然し滅多な物を食べては臭や何かで直ぐに人に知れますから、臭のせぬやうな、容の高くない物を、そつと簞笥の奥か何かに隠して置きまして、折々獨でそれを食べるのを、此上もない樂みにして居た事が御座います。或時など、里方に行つて色々と評定しましたが、いつ

その事、それは砂糖が善からうといふので、白砂糖の袋を一つ脊中に忍ばせて戻りまして、人目の無い折々に、ちよい〳〵とそれを嘗めますのが、どんなに心ゆかしになつたか知れませぬ。それが一層善い折で、湯吞に一ぱい浪々と砂糖湯にして飲みます時には、又一段の嬉しさで御座いました。こんな事を申しますと、マア何といふ淺ましい事かとおさげしみも御座いませう。又聞くお人に依つては、そんな事がと嘘の様にも思召すで御座いませうが、私は眞實ありのまゝの所をさらけだしてお話し致すのです」と聞かされた事があつた。是を嘘と思ひ、淺ましいと嘲ける者があるならば、それは自分でヒモじい目を見た事のない人だ。少しく苦勞をした人は、必ず此の懺悔話に同情を寄せるであらう。中等以上の家庭に於て、明治卅九年の今日に於て、こんな馬鹿々々しい現象が存在するとは、諸君、實に腹も立てられぬ次第では無いか。

◎女天才の束縛　話は變るが、雜誌『新公論』の中に、三輪田眞佐子氏が、簗川星巖の夫人紅蘭女史の落款の印章に『針線餘事』とあつたのを見て、女子の天職が家事に存するを感じたと書いてある。是は餘ほど意味の多い話である。眞佐子氏は『家事』にも秀でゝお居で

か知らぬが、兎にかく教育家として知られた人である紅蘭女史が其の印章にある如く『針線』の事に達して居たかどうかは分らぬが、兎にかく彼は畫家であり、又詩人であつた。斯くの如き文藝の人と教育家とが、『家事』を忘れず、『針線』の事を重んずるは、ちよつと感心したい樣な心地もするが、善く考へて見ると、實は情ない事である。世間の道德（即ち男子の勝手に拵へた道德）が、女子を家庭に押籠めて、家事を女子の天職と極めてしまつたので、それでモウ女子と生れた者は、假令他に如何なる才能があらうとも、その才能を發揮させる事が出來なくなつた。たま〱世間の常例を破つてそれを發揮させる者があれば、世間は直ぐにヤレ生意氣だの、ヤレお轉婆だのと嘲笑する。そこで女の悲しさには、折角の才能を持ち腐りにするか、さなくば成るべく其の才能を控目に發揮して、一方には絶えず其の言譯に苦心せねばならぬ。紅蘭女史が『針線餘事』とやつたのも、實は世間の俗論（即ち當時の道德）に對する義理の言譯であるのだ。紅蘭女史の天

職は文藝にあつたので、決して『家事』にあつたのでは無い。あれほどの文藝の才のある者に、何も針を持たせて星巖先生の着物を縫はせねばならぬ事は無いぢや無いか。然し女の癖に詩を作つたり、畫をかいたりして、亭主と二人で遊びあるいてばかり居る、あれでも女か、などゝ評せられるのが厭さに、ナニ私は是でも家事を忘れては居ませぬ、こんな畫など書くのは、ホンのお針の暇にするのです、と言譯をする代りに彼の印章を捺したのである。三輪田女史とて其の通り、今日一廉の教育家として立てる丈の學問をしたのであるから、其の若い時には、必ず學問と家事との衝突があつたに相違ない。其の衝突に少からず苦心して居る處に、紅蘭女史の『針線餘事』の印章を見て、あゝ成程紅蘭さんほどの人でさへ猶ほ斯う云つて居なさるのだから、是は女の身として何處までも家事を餘所にしてはならぬものだと、深く茲に悟る所があつたのだらうと想像せられる。三輪田氏は勿論言譯の爲に家事天職說を唱へて居るのではなく、眞にそう信じて居らるゝ

に相違なく、紅蘭女史とても眞實『針線』を以て女子の本職と考へて居たかも知れぬ。然し彼等が信じて之を言ふと、態と之を言ふとに係はらず、我輩を以て之を見れば、同じく是れ世間の道德、風俗、習慣に迫られた結果であるので、男子に壓迫せられたる女子の地位を哀れと見るの外は無い。どうか早く此の社會を改良して『家事』の煩累を以て斯くの如き女天才を束縛したくないものではありませんか。

◎從順の美德?　雜誌『婦人世界』の中に、澤柳政太郎君(最も進歩主義を有すと聞えたる教育家)が、西洋の男子が日本婦人の從順な事を聞いて羨ましがつて居るといふ話を書いて、是が日本婦人特有の美德だと譽めて居るが、それは西洋の男子が我儘の仕放題なる日本の男子の地位を羨んだので、少しも婦人の美を認めたのでは無い。其の證據には、西洋の婦人が日本の婦人を羨ましがつて居るか、どうか、それを聞いて見るが善い。

◎傍若無人の言　登張竹風君が讀賣新聞にこんな事を

書いた。曰く『女子は男子に服從すべきものなり。女子の幸福は茲に存す。……男子は自己の意志に幸福を求め、女子は男子の意志に幸福を求む。余が女子の個人性を認めざるは、之が爲なり』と。傍若無人も亦た實に甚だしいでは無いか。男子にこんな事を云はせて當今の婦人は默つて居るのか。

◎革命的戀愛　雜誌『新紀元』の中に、木下尚江君は『革命的戀愛』といふ文字を使つて居る。『戀愛』の二字を優柔淫靡の意義にばかり解して居る者は、少しくこんな處で眼を醒すが善い。戀愛に『革命的』の意氣が籠つてこそ、始めて眞に尊くなるのだ。淺薄卑俗なる習慣道德の羈絆を脱し得ない樣では、戀愛の價値は直ちに半減してしまふ。

▲汽車がゴロ〳〵と大きな響をさせて走るの
▲電車がガン〳〵とベルを鳴らして往來の人をおどかすの
▲犬がウーと唸つて人に咬付きさうにするの
▲七面鳥が羽を張つたり顔色を變へたりしてスル〳〵とかけて來るの
▲紳士が髭を生やし金縁眼鏡を掛けるの
これらは皆な同じ事である。とは、或る社會心理學者の説である。(韶)

雪姫物語(上)

白柳秀湖譯

はしがき

◎こゝに『雪姫物語』といふのは、有名なデンマルクの文學者、ハンス、アンデルゼンが書いた『スノー、クヰン』といふ御伽話を抄譯したものであります。これはアンデルゼンの數あるお伽話の中で最も有名なものでございまして、千八百四十五年作者がオルデンブルグの伯爵の宮殿で、多くの家族のために朗讀して、金剛石の指輪を贈られたといふ傑作でございます。

◎お伽話といへば大かた少年諸君がお相手でございますけれど、此作者、殊に『雪姫物語』のやうなのは、八十の老翁さんが讀んでも、博士、大博士なんどゝいふ髯の生えた先生達が讀んでも、いよ〳〵面白くつてたまらないといふのでございます。殊に譯者の見る所によりますと、之は作者がドーヤラ今日の科學者をいましめる爲に書いたものらしい科學者

お伽話といふ世にも奇態なお伽話。

◎之れを紹介するに當りまして、原作者が生命と致して居りました所のキリスト教の信仰を、なるたけ露骨にあらはさぬ樣致しましたのは、作者には申譯のないことでございますけれど、私はこれを洽く少年諸君の讀物にしたいと思ひますところから、殊更、金玉の作に多少の加減を致しました次第。譯者がキリスト教を嫌つたなどゝいふお猜疑は眞平御免を願ひたい。

◎三回目に出て來るいろ〳〵な草花の、述懷、これは少しお分り惡いかとも思ひましたが、西洋では數百種の可愛い草花に皆それ〳〵古い言ひ傳へや、また其花が表す意味といふやうなものがありますのでこういふ趣味を養ふのもと思ひまして、長々と譯出して置きました。

(一)悪魔の大發明

昔、昔、大昔の事でございました。或る處に、それは〳〵意地のわるい惡魔が住むで居りましたが色々樣々

な惡戯をしまして、自分は手をたゝいて喜んで居りました。或る日のこと、惡魔はいつになく機嫌がよく、頻りにいさんで居りましたが、そのうちに、大變な工夫をこらしまして一個の鏡を造り出しました。その鏡といふのは世にも不思議な力をもつて居りまして、何でも此天地の間にありとあらゆる、美しいまた善い事物を映して見ますと、それが二目と見られぬ、醜い惡い事物に現はれるのでございます。また初から惡い醜いものを映しましようものならば、それこそ大變、何ともかとも云ひ樣のない程、恐しい怖いものに見えるのでございました。美しい山水の景色を映して見ますと、それがもう血なまぐさい荒野原になるので御座います。また其鏡で人間を映して見ますと、今度は恐ろしい怪物の樣に見えまして、宛然胴がなくて首ばかりのものが歩いて居る樣に見えるのであります。人の顏と申しますならば、それはもう誰だか、到底別りかねる程であります。それも其筈で一個の黑痣がございましても、何しろそれが口から鼻へ顏中一面に見えるのでございますから、たまりません。惡魔は之を見まして雀躍して喜んで、其巧妙な發明を誇つて居りました。處が皆さん此惡魔は發明をする程ありまして、相應の學者であつたと見えて、自分の學校を持つて居りました。其學校へ來る生徒は各自これまで見て來た、一番珍らしい立派なことを此惡魔に話して聞かせることになつて居りましたが、惡魔はそれを聞くと、喜び勇んで、直ぐそこへ此鏡を持つて行きそれを映して見ては、娯んで居りました。けれども、それも暫らくで、やがて大かたのものは皆映して見て仕舞う事になりましたが、もとより傲慢な惡魔のことでございましたから、此上は何かもう一段聖い美しいものを映して見たいと思ひまして、それから色々と工夫を凝らし、考をめぐらしました。

かくて惡魔は程なく、大それた希望を起したのでございます。それは今度は其鏡を天國へ持つて行つて、天使の姿を映して見ようと思ひついたのでありました。それで惡魔は早速、件の鏡を用意致しまして、大空遙

かに飛び揚がりました。地上でこそいろ〳〵な惡戯をしても、我まゝ一ぱいになりましたもの丶、天國の領分へ入りましては、そう甘くは參りません。惡魔が段々高く高く揚がりますにつれて、手に持つて居る鏡は次第に重くなッて參りまして、終には惡魔も流石にさゝへる事が出來なくなり、とう〳〵手から落してしまひました。

惡魔の手をはなれた鏡は、見る〳〵うちに下界をさして矢を射る樣に落ちて參りましたが、やがて地上に落ちますと、恐ろしい音をたてゝ、粉末微塵になつて壞れてしまひました。二三里四方の所は多分工場で烟硝庫が破裂したよりも恐ろしい音がした事でございましよう。まことにあぶない話でございます。處がお話はこれからなので、其鏡は微塵になつて、雲の樣に霧のやうに空中に飛び擴がり、山から川へ、國から國へと、風に吹かれて散つて行つたのでございます。

其鏡の粉末が一粒でも人の眼にとびこみましようものなら、サア大變です。其人はそれからといふものは、

どんな美しいものを見ましても、醜いきたないものにしか見えません。また外の物事に致しましても、何でも惡いいやな方ばかりが見えるのでございます。もとより極々小い粉末のことでございますから、當人はそれが眼に入つたなどゝは少しも氣が付かぬのでございます。けれど皆さん考へても御覧なさい。たとへ塵程の、極く小い小い破片に致しましても、もとが惡魔の鏡でございますから、大きい時と同じ樣に、惡いはたらきを致しますのではございませんか。或るところでは此破片に、口から心の中へ飛び込まれた人がありましたが、其人の心はもうそれから恐ろしい冷たいものになりまして、宛然で氷のかたまりの樣になつてしまひました。また其飛び散つた破片のなかには少しは大きいのもありまして、或人はそれを拾つて窓硝子に使ひましたが、これも大變、此窓から見える友達の顔はどれも是も丁度惡魔の樣でありました。また、そのほかに、眼鏡に使はれた破片もございましたが、之をかけて物を見ますと、何ひとつ滿足に正しく見えるもの

はございませんでした。

（二）蝶太郎と花子

お話が變りまして、ある處に大い〳〵都會がございました。こゝは非常にたくさんの人と家とが、こみあつて居りますので、こゝに住んで居る人は、誰も自分の庭園を持つて、それへ野菜や草花を作つて樂しむといふやうな事は出來ませんでした。それで皆、各自小い植木鉢を持つて居りまして、それに草花を植ゑて眺めて居るのでありました。さて此都の中のある町に二人の少年が住んで居りました。一人は蝶太郎といふ賢い男の子で、一人は花子といふ可愛い女の子でございました。此二人は他の人の植木鉢よりも少し許り廣い花園を持つて居たのです。二人は兄弟ではございませんでしたけれども、眞の兄弟にもまして仲よく、互に愛しみあうて居りました。此少年の親たちは、どちらも町の二階住ひでございまして、互に隣り合うて、暮して居りました。この二階の屋根と屋根とは兩方から突き出て居て、向ふの窓から此方の窓へ、天氣の好い日

には、互ひに往來が出來るのでございました。兩方の父親は互に可なり大きい木の箱を持つて居りまして、それには臺所の野菜と薔薇の花とを植てまことによく成長して居りましたが、それは件の窓の下へ置かれてあつたのでございます。春の初から青々とした芽をふきまして、野薔薇は互に傍の窓へまとひ付き、それから手を延ばして、双方から抱き合つて、やがて美しい花をひらきます。それが宛然、綠の凱旋門を見る樣でありました。二人の少年は此美しい花の下で互に窓から出て靜かに仲よく遊ぶのを常として居りました。けれども冬になりますと、此たのしみは全く失くなつてしまひまして、時には其窓さへも、永い間雪と氷とに鎖されてしまう事があるのです。其時には賢い二人の少年は互に一錢銅貨を爐の火で熱くして來まして、氷つた窓の硝子にあてゝ居りますと、雪がだん〳〵溶けて來ますので、その圓く明いた穴からお互に可愛い眼で、のぞき合ふのでございました。しかし又お互に遊び度い時には、長い梯子段を下りまして、外へ出て

雪の中を通つて來なければならないのでございます。ある雪のふる日でございました。蝶太郎のお婆さんが窓から外の方を眺めながら、面白く蝶太郎にはなしかけました。

「蝶太郎や、ごらんよ。今あんなに白い蜂がたくさん飛んで居るよ。」

「お婆さん、あの蜂にも女王様があるだろうか」

蝶太郎は、まへかたお婆さんから蜂の女王の事をきいたことがありましたから、蜂の飛んでる様な雪の降るのを見ながら、不思議そうに此うたづねました。

「それあ、やつぱり在るでしようとも。けれども女王様はアノ白い蜂の一番たくさんかたまつて居る處に居るのでしようよ。それで、其處は遠い〳〵黒雲のなかにあるのだから、地の上には下りて來ますまい。どうかすると夜半に此町などへも下りて來る事があるけれど、其時には、もう窓も何も堅く氷つてしまつて、とても見る事なんか出來ないのさ」

すると其傍に蝶太郎と一處にきいて居た、花子は口を

出しました。「ぢやあ、あの白蜂の女王様は此部屋へでも來ることが出來るの？」

「此處へ來ようもんなら、僕が、アノ、あの爐の傍へ連れて行つてやらあ。そうすりやあ、きつと溶けてしまうだらう。」

蝶太郎はいかにも勢の好い聲で申しました。

お婆さんは蝶太郎と花子の頭を撫でゝやりながら、なほ、いろ〳〵なお話をしてやりました。これから四五日たつたある寒い晩のことでありました。蝶太郎が窓の所へ椅子を持つて行きまして、小い穴から外のけしきを眺めて居りますと、今しも外は雪が一片、二片と降り初めたところでありました。すると一片きは立つて大い雪片が枯れた薔薇の箱の端へ落ちましたが、見て居るうちに、何だかそれがだん〳〵大くなつて行くやうで、しまひには立派な女の姿になつてしまひました。見ると輝くばかりの白い裝束をつけて、何ともいはれぬ神々しさ氣高さでございました。兩眼は丁度大空の星のやうに、きらめいて、瞬もせずにヂツとこち

らを見つめて居りましたが、やそら蝶太郎の居る窓の方へうつむきかゝる樣な氣配でありましたから、流石の蝶太郎も少し薄氣味惡くなりまして、椅子から飛び降りてしまひましたが、其はずみに何ものか大な鳥が窓のそばへ飛んで來た樣な物音が致しました。

それから程もなく長い淋しい冬の雪空も去りまして、朗らかな霜日和となりましたが、それも暫くで、やがてたのしい春の日はめぐつて參りました。日の光はうらゝかに、草や木は美しい若芽をふいて、去年の燕も來て巣をかけ初めました。待ちに待つた二人の少年はまた薔薇の下で互に手をとつて仲よく遊ぶことが出來るやうになりました。二人の少年はほんとにやさしい薔薇の花の樣で、神樣の眞の美しさは、花にも人にも其姿があらはれて居るのでありました。

或日のこと、蝶太郎と花子とは窓の下で仲よく獸と鳥の描いてある本を餘念なく見て居りましたが、近處の時計臺の鐘が丁度十二時をうつて居ります時、蝶太郎は、『オヤ!!何だろう!!』と云うて胸をおさへましたが、

『何か目へ物が入つた!!』花子はいそいで蝶太郎の頸のまはりに手をかけて、眼の中を見てやりましたが、何も見つかりませんでした。

『もう取れたんだろう』蝶太郎はこういひました。けれどもそれは決して取れたのではありませんでした。皆さん、これがアノ恐ろしい惡魔の鏡の破片でございましたから、悲しや氣立のやさしい蝶太郎の、春の樣な心は此時から忽ち氷よりも冷たくなりまして、恐ろしい惡少年に變つてしまひました。

蝶太郎は直ぐモウ本を抛り出すやら、植木を折るやら、亂暴を初めました。

『何だいこんな下らない薔薇なんか。皆、蟲喰ひぢやあないか、恁んなもの駄目だ』と云ひ樣美しい莟の花を二本まで引き拔いてしまひましたが、

『何てきたない箱だろう』と云ひながら足でポンと蹴たのであります。

『蝶さん何をするの！』と花子が叫びますと彼はます〳〵たけり狂ひまして、他の薔薇をまた引き拔いて捨

てゝしまひ、そうして、

「花子さん！一體何をメソ〳〵泣くんだい。何だ其顔は、見ともないぢやないか。」

かう云つて、やさしい花子をつきのけて外の方へ飛び出して行きました。

暫くしてから、花子は又さつきの繪の本を持つて參りまして、蝶太郎と遊ばうと思ひましたが、蝶太郎は只一言

「恁んなもの、長い衣服を着た赤ン坊が持つものだ」

というたまゝ更に取り合ひません。それで親切な蝶太郎のお婆さんが何か面白い話をしてやろうと思ひましても、口を開くと直ぐ傍から「けれども」「だけれど」などと差出口ばかりいたします。そして間が好いと、いつの間にかお婆さんの背後へ廻つて、眼鏡をかけた振をして、たくみに老人の眞似をしては人を笑はせます。それが倦きると今度は街路へ出まして、往來の人の歩き振りや、談話を小憎らしく眞似します。こんな事がまた如何にも上手で、何か人の奇態な癖を見つけ

ては、直ぐその眞似をするのでございます。「マア、敏活い小僧だねえ、キツト天才だろう」などゝいうて行く人もあります。蝶太郎が此んなになつたのも、原因は皆、此子の眼と心とに入つた、かの破片の故でございます。何よりも愛しんだ花子をさへ、此頃は顔さへ見れば悪口雜言を並べたてゝ、いぢめるやうになつてしまひました。そして、其の遊戯も、今までとは打つて變つてしまひまして、小兒らしくないことばかりして人を驚かせます。丁度冬の日のことでありました。蟲眼鏡を持ち出しまして、ハラ〳〵と降る雪を自分の青色の上衣の上にうけまして、如何にも科學者らしい風をして眼鏡の上から、のぞき込んで花子に申します。

「ねえ花ちやん。どうだい僕なんか、うまいもんだろう。オヤ〳〵眞の花よりも綺麗だ。まだ何處にも傷がないや。雪は溶けてしまう迄は、何時までゝもこうなんだからなあ。マア一寸見給へ」

こんな風でございます。間もなく、彼は大きい毛皮の外套と、厚い手袋に身を固めまして、背後には自分の

橇を曳きながら花子の家の二階の下へ參りまして『花ちやん！僕ね、四つ辻まで橇に乘りに行つて來るよ。皆あそこに遊んで居るから』こう云ひ捨てゝサツサと行つてしまひました。此街の丁度中央の辻に大な廣場があつて、雪の深く積つた日には、街の少年等が集まつて橇に乘つて遊ぶのを常として居りました。此少年達の中でも大膽なものは通りかゝりの田舍行の大きな馬橇に自分の手橇を結びつけまして、可なり遠くまで走つて行くのを此上なく面白い事として居ります。さて彼が此處で餘念なく遊んで居りますと、丁度其傍へ田舍行の大い一つの橇が參りました。見ると白く塗つて其中には誰とも知れませんが、あらい白い毛皮にくるまつて、白い帽子を被つた人が乘つて居りました。其の大橇は此廣場を二度ばかりかけ廻つて、蝶太郎の前へ來ましたから彼は得たりかしこしと、自分の橇の綱をそつと此大なの尻に結び付けますと、やがて其の大橇は、蝶太郎の橇を曳いたまゝ、一目散に走り出しました。そして、だん／＼と其速さを増して、次の

町から次の町へと矢を射る樣に走りぬけて參ります。其間にも橇の人は時々背後をふり返つて、少年の顔を見ては、さも嬉しさうにうなづいて見せますのが、いかにも久しく親しんだ人の樣な素振でございました。蝶太郎もあまり速く走りますので、流石に少しは氣味惡くも思ひまして、時々結んだ綱をゆるめて呉れといふやうに賴みますと、其人は同じやうにうなづいて見せますので、少年も安心して、座つて居りますと、橇はいつの間にか、町はづれの門を拔けて早やさびしい田舍道を飛んで參ります。

折しも雪はドシ／＼と降つて參りまして、今は一寸先きも見えない樣になつて來ましたのに、何處まで行くのか、大橇はまだ、風を切つて走つて居ります。少年も今は氣が氣でありません。どうかして綱を解いて大橇から離れたいと思ひまして、いろ／＼氣を揉んで見ましても、どうも仕方がありません。さすがの蝶太郎も途方にくれて、大聲をあげて泣き叫びました。けれども誰一人、此少年を助けてくれる人もございません。

空しく雪の塊が少年の顔をうちつけるばかりです。かれこれして居る間に、こはそもいかに、橇は段々と大空にまひあがる様にも思はれます。いくら悪少年でも最う堪へることが出來ません。苦しい時の神だのみ、一つ御祈りをして見ようと思ひましたが、あひにく、それ以來御祈りの事などは、もう、すつかり忘れてしまひまして、覺えて居るものは只九々の數へ方ばかりでありました。

雪はます／＼はげしくなつて參りまして、大橇の人も蝶太郎もやがて、白い雛鶏の様になつてしまひました。暫らくすると橇はパツタリとまりまして、田舍男らしい人は此時はじめてスラリと立ち上りました。雪まみれになつて居た帽子と毛皮を取り去けますと、こはそも如何に、見上げるばかりの雪姫が、いと神々しく少年の前に現はれたのでございます。

「速かつたわねえ。………マア何をそんなに怖がるの？サア妾の温い毛皮にくるまつておいで!!」

と云ひながら雪姫は少年の手をとつて、自身の橇の中

へ連れて參りまして、件の毛皮で少年を包みましたが少年は温いどころか、宛然雪の中へ埋められてしまうやうな氣持がいたしました。

「お前さんまだ冷いの？」と云ひさま、雪姫は少年の額に接吻をして呉れましたが、その唇の冷さと申しましたら、それこそ氷よりも冷いので、身を切られるやうでございました。それでやがてその冷さが、しみ／＼と蝶太郎の心のなかまでも、しみわたりまして、いまにも凍え死ぬかと思はれましたが、それも暫くでやがては何の寒さをも覺えぬやうになりました。

「僕の橇は!? 僕の橇を忘れちやアいけないよ」

少年は直と此事を思ひだしたのでございます。雪姫は此時再び少年の額に接吻しましたが、彼はもう何時の間にか、可愛らしい花子のことも、お婆さんのことも兩親のことも、スツカリ忘れてしまつて居たのでございました。見ると蝶太郎の橇はいつの間にか、白い雛鶏が背後からそれを曳きながら隨いて參ります。

蝶太郎は雪姫を見上げますと、其美しさ、其あでやか

さ、世にかばかりの姿があろうとは思はれません。いつか窓から彼が見た雪姫とは違ひまして、其國の人なつかしさ、少年はもう心から姫を慕はしく思ふ樣になつて參りまして、自分がよく心算の出來るといふ事やまた自分の國の面積や人口の數なんかも知つて居るといふ事を、いと自慢らしく申しました。雪姫は只靜かに笑つたまゝ、少年を連れて、黑雲の上をさして虚空遙かにまひ昇ります。吹雪はますく\みだれて、ちようど嚴かな古歌を彈する樣な音をしてすさびます。二人は今山を越え森を越え、海を越え湖を越えて走ります。そして彼等の下には、暴風が吹きすさんで、狼は雪を蹴立てゝ吠えて居ます。彼等の上には、黑い鳥が物すごく叫びながら飛び越えて參ります。かように致しまして、蝶太郎は雪姫に誘はれて何處ともなく行つてしまつたのでございます。あゝ花子に蝶太郎、此先は如何なり行くのやら。面白いお話は之からです。

記者申す。此の「雪姫物語」のお話は、嘗に本社に於て出版を企てたる彼の「少年叢書」の第二篇として、白柳秀湖君の譯されたものであります。大そう面白く讀まれますので、之を三回に分けて本誌に載せることに致しました。御愛讀を乞ふ。

或る時支那で、一人の男が、詐欺取財をした爲めに、警察に捕へられた。其の男は雪を乾して、白砂糖の積りで賣つたからだ。

或るあわて紳士が「大急ぎだ」とて馬丁を叱りとばして馬を用意させ、ヒラリと跨がつたのは後ろ向。馬丁が恐る〳〵其事を注意すると、紳士ぬからぬ顔で、「乃公がドチラへ行くか知りもせぬ癖に。」

●由分社より（紹）

△本誌の前月分は紙數も殖えるのだし、それに年末になると活版所の方で仕事が込み合つて困るといふので、少しく手廻しをして暮の十七日に編輯を〆切つた。そして元日の朝、諸君が起き出る頃には、本誌は既に諸君の樂しき家庭を音づるゝといふ運びにしたいとは、本社中大車輪の手答であつた。ところが其の目算がスツリと外れ、あと僅か一日といふ三十日になつても、未だ校正すら濟まぬといふ有樣。ボクはモウ氣が氣でないので其日の晝から活版所につき切りで「早く早く」とばかり忙き立てた。けれど活版所は幾日も徹夜しての忙がしさであるから、とうとう校正の濟んだのは翌卅一日の午前零時、電車はモウ通らなくなつて居た。晝から飲まず食はずに校正刷と首つ引をしたボクは日比谷公園まで來て濠端の寒い夜風に當つて始めて我に返つた。ホントに目の廻る樣な忙がしさだつたので、今まで何をして居たか殆んど判らぬ。校正も何をドウした事やら。

△大晦日の晩、いくら遲れたとてモウ出來て來さうなものと、立つたり居たりして待つて居たが、雜誌の出來て來たのは、とうとう除夜の鐘を聞いて稍暫く經つてからであつた。そら來た包め、切手を貼れ、といふので、社中一同必死の大活動。漸と包みが出來ては了つたが、車屋はモウ起きては居らず、エヽまゝよ序手にやつけろと、夜中のことゝて見えも外聞も構はず、大きな風呂敷を持ち出して、脊負ふやら提げるやら、家内中總掛りでツイ近所の郵便局まで運んだ。局でも「徹夜です」とてペタンペタンと日付印を押して居た。ヤレ先づ濟んだかと思へば早や夜が明けた。

△「坊はモウ四つになつたのだわれえ」と、大きくなつた雜誌を手に取つて、堺さんは嬉し氣に撫いた。ボクも始めて手に取つて眺めた。見よ！寧馨兒の如何に疵つけるよ！誤字、脱字、不體裁。折角の可愛い兒のお正月を臺なしにして了つた。面目ない。あゝ我ながら不滿足の事ばかり。諸君どうぞ今度だけは許して下さい。堺さんも金澤の旅行先で嘸呆れて居らつしやるだらう。

△斯樣の次第で、年始狀の爲め郵便物の混雜する際ではありましたし、或は遲着があつたかと氣支つて居ります。以後は印刷所の方も我々の方も、十分勉強して必ず晩れぬ樣に致したいと思ひます。

△右の如き混雜にも係はらず、前號の賣行と評判は頗る善い方でありました。本誌の發行部數は是よりして大いに增加する事と信ぜられます猶ほ讀者諸君の御援助を乞ふ。

△本年より發行日を一日と改めました。每月一日發行といふ方が、何だか極りが善い樣です。

△前號第一頁の「早」は「見」、第六頁下段三行目の「離婚」は「雜婚」、それからローマ字欄第一行目の Wake が誤つて Wae となつて居たのがありました。其他は一々正誤致しませぬ。

△堺さんは豫て其の研究されつゝある男女兩性問題を蒐成して一書を世に出さんが爲めに、舊臘より金澤市に旅行し、一月十九日歸京後も、引續き尚筆硯を磨せられつゝあります。、本月中には出版の運びに至るでありませう（詳細は廣告欄御覽を乞ふ）

△前號の「日本服の將來」に就て大分物議が持上つた。あちらでも「不惑服」こちらでも「不惑服」「これから支那服をお召しになつたら」など四方から冷かされるので、ボク少々ヘコ氣味である

讀者諸君何か御妙案あらばチト御加勢を願ひ上げます。

△讀者諸君のお手紙の文字（殊に地名、人名など）に讀みにくいのが多くて困ります。善く知つてゐる地名などならば、大抵の字は判じても讀みますが、全く知らぬのになると、如何にも判斷の出來ぬ場合が多くあります。今後は何卒分り易きやう楷書にて御認めを願ひます。

●讀者より

▲本年の初夢　常々二なき友と愛讀致し居ります家庭雜誌も本年より大層成長致され、私等の悦はどれ程でせう。定めしどなた樣にも同じ事と存じます。さて本年の初夢に、私は喜ぶべき事を見ました。それは御社が大懇親會を催さるゝとの事ですが私は其日を忘れて仕舞ました。或夜使に出まして道に迷ひ、知らず知らず廣い屋敷町の大きな教會堂の前へ來ますと玄關の扉が明いて居りまして、中より流れ出る電燈の光まばゆく、內にはハイカラの男女幾千名が蝟集し、今し演說終つて喝采の聲雷の如しといふ處でした。聞けばこれが貴社の集會でした。私は使も何も忘れ果てゝ其處へ入りましたら、室內の裝飾といひ實に見事で、每々近所の外人の家で見る舞踏會の盛なのも之には及びません。平生貧乏長屋に住んで、筒袖着て炊事洗濯なんどをやつて居る私は、俄かに高尙な眞似が出來て、あゝ實に嬉しくありました。が是は夢でした。なんといふおめでたい夢かと、かくは年始の御挨拶がてら、くどくどゝ申上げます。希くは此夢の樣な盛大な會合を催さるゝ樣に願ひたいものです。いや今にきつとそうなりませうと期して待ちます。尙平生御指導の御禮やら何やら申上げたいと思ひますが、餘り長くなりますから失禮いたします（赤坂、高田福氏）

▲二年間の愛讀者　たりし小生は、こゝに又第四卷の愛讀者になるつもりです……。記者足下、小生は客歲かつて三回ばかり拙稿を投寄致した事がありました。而し不幸にして共に揭載の榮を得る事が出來ませんでした。尤も之は不幸と申すよりも寧ろ自己の不才淺學、其の資格を有せなかつたのでせう。而も小生は本年に於て猶こりずまに隙を得るに任せて小言を投寄して、微力ながら自己の可能範圍に於て本誌の所期に盡したいと思ひます。但し其の取捨は勿論記者の權能ですから容喙はしません。どうぞ宜しい樣に。只一寸おことわりして置きたいのは、讀者の機嫌を損れまいとして好い加減な愛想的な御挨拶を下さることは止して頂きたい小生は世辭と御愛想とは大きらひですから。若し揭載出來ぬなら出來ぬと、編者の意のある所を直言して貰ひたいのです。その方が餘程心もちがよいのです。終りに於て、堺、西村、深尾氏はじめ同人諸氏の健全を祈ります（村澤生氏）

▲滿洲より　平和の新年を祝し益々諸君の奮鬪を祈る。「七五三は皆古傢なり胡砂の年」（砲兵第三獨立大隊第四中隊、中田一郞氏

▲舅姑と嫁の間柄　に就ては、私は數年以來、非常に苦心致しまして、之が爲には、幾回か泣き、幾回か絕望しかけました。然るに、幸にも私の赤誠が漸くにして私の妻にも、父や母にも、通じたと見えまして、今ではもうそんな心配もなく、十分幸福な生活を送つて居ります。前號の西村さんの御文を拜見して、今更深き感に打たれました（〇〇生氏）

新刊紹介

▲英譯良人の自白(一)　木下尚江氏の小說「良人の自白」は一世の耳目を聳動せしめた結果、遂に英文に譯された。譯者は東京帝國大學文科の敎師アーサーロイド氏で、今度第一冊(原作上篇の中分)だけ出版せられた。譯し方は緻密な直譯だが、ちよつと拾ひ讀をした所で、「スチヤラカチヤンにおやりよ」などゝ云ふ俗語は勿論省い加減に譯してあるし、お玉が俊三の事を「ちよいと好い男よ」と云つたのに對し、側の女が「オイ、冗談ぢやないよ」「なぐるよ」などゝ云つた如き微妙な處は明かに誤譯されて居る、尤もそれは無理もない事である。(價六十錢、麴町區有樂町有樂社發行)

▲へナブリ倶樂部(第三號)　相變らず色々面白い漫畫があるが、今度は川柳を少し借用して置かう。「玉章の消した文句が氣にかゝり」「子へみやげ殘念そうにもう寢たか」「お蕎麥など食べて來ませんねえ母アちやま」「風の子をヤレ寒かろの冷たかろの」。以下「白粉」の課題「鼻嚙みですと理屈をつけて塗り」「襟足は母が上手につけてやり」「お上手につけると乳母アやほめそやし」「あたいにもつけてと側でせがんで居」「白粉をチヨット坊やは鼻につけ」「白粉をつけた良い子は泣きません」「白粉の瓶に蓋をさして置き」「白粉が過ぎて亭主ににらまれる」「あたいもとお下げ鏡に顏を出し」「馬鹿息子寢る時そつと塗て見る」「白粉を塗らぬが姉御自慢なり」(一部十錢、東京淀橋小學校前、へなぶり倶樂部)

▲ほとゝぎす(第九卷第四號)　「野菊之墓」(左千夫)といふ、極めて可愛らしい、極めて哀れな身上話がある。十七歳の娘と十五歳の少年との戀物語で、其娘が強いて他へ嫁せしめられて、程なく死んだといふ丈の事であるが、實話だけに人を泣かせる所がある。そして四十頁の長文を苦もなく讀ませる。例の有名な「吾輩は猫である」の續きもタツプリと(五十頁あまり)出て居るが、どうも前の方ほど面白くない。學者的駄洒落とも云ふ可き者が大部分を占めて居る。然し又こんな風な淡々とした面白い所もある。「今夜は中々あがるのね」「飲むとも。御前世界で一番長い字を知つてるか」「えゝ、前の關白太政大臣でせう」「それは名前だ。長い字を知つてるか」「字つて横文字ですか」「うん」「知らないわ——御酒はもういゝでせう、是で御飯になさいな、ねえ」「いや、まだ飲む。一番長い字を敎へてやらうか」「えゝ、さうしたら御飯ですよ」「Archaiomelesidonophrunicherata といふ字だ」「出鱈目でせう」「出鱈目なものか、希臘語だ」「何といふ字なの、日本語にすれば」「意味は知らん。只綴り丈知つてるんだ。長く書くと六寸三分位にかける」(本號に限り價卅五錢、麴町區富士見町四丁目、俳書堂)

▲わらはの思ひ出(福田英子著)　曩に「妾の半生涯」を著して自己の實歴を大胆卒直に叙述したる人、此度は小說を以て今の婦人の運命と希望とを書いた。小說としては、末廣鐵腸の「雪中梅」ぐらゐな所かと思へど、婦人自活の必要を說き、戀愛結婚の自由を說き、遂に基督敎と社會主義との思想に入る所、さすがに當年の景山女史の意氣を存し、猶ほ其の晩年に於ける進境の少からざるを示して居る。(價四十錢、本郷眞砂町平民書房)

▲新公論(第廿一年、第一號)　本號には當代諸名士の「余の受けたる感化の原動力」といふ面白い記事がある。其の二三を次に摘錄する。人としては母、書物としては四國立志編、之に次では山陽先生(高島平三郎氏)。福澤諭吉氏の西洋事情、世界國盡しなど、蓮如上人の御一代聞書、基督の山上の敎訓、保羅の羅馬書、孟子の王道說、トルストイの個人改良說など(佐治實然氏)。日本外史、孟子、色譯用心記、安心決定

紗、蓮如上人御一代聞書など（村上專精）。小川寅六氏、宮崎小二郎氏、久野文雄氏、竹中半兵衛（太閤記中の）、メランクトン（ルーテルの親友）、クロンウエル、ボクル、グラッドストーン、スマイルスの著書（中に就て職分論）、シーレーの著書、論語、聖書（田川大吉郎）。兩親の慈愛（竹越與三郎）。祖母、父、兄、祖母の侍婢某、父家の書生達、オットーのお伽噺集、西遊記と水滸傳（巖谷小波）。剛直不羈なること父の如く克己勤勉なること父の如きは、稀に見る所に御座候、小生は斯く父を信じ居候（斯波貞吉氏）。概して之を言へば、今日の中年の人は、論語、聖書、日本外史、スマイルスの著書の感化を受けた者が甚だ多い。殊に注意すべきは「母」を以て感化の原動力と認めた人の甚だ多い事である（十二錢、本郷東片町、新公論社）

▲**新紀元**（第三號）　平和號と銘打ちて、世界平和主義の爲に多くの論議報導を載せて居る。殊に「時事評論」中、「少女樂師の使命」と題せる一節は、曾て旅順勸降使たりし「失明」の勇士山岡少佐が、戰爭に於て兄と叔父とを失へる露國の少女クロースチッフ孃の音樂を靑年會館に聽くの事實を記し、更に之を評して曰く「嗚呼敵とは何ぞや、味方とは何ぞや、敵國露西亞の少女クロースチッフは、此の迷想妄執を破散すべきの大使命を擔うて、日本の首都に來れるなり」と。吾人は最も深く此の一文に動かされた（十二錢、東京角筈新紀元社）

▲**火鞭**（第五號）　年少氣鋭なる諸才人の手に成る事とて、槍の穗の突然として脚下に群り出でたるが如く、ヒシ〳〵と人に迫り來る。戀愛論（小田頼造）、進化論の法則より戀愛を論ず（小川金次）、野口曾惠子觀（烏有生）等は兩性問題研究の爲め甚だ有益の文字である。（十錢、本郷眞砂町、平民書房）

▲**メリー・リード孃小傳**（坂井義三郎氏著）　リード孃は印度の癩病者間に基督敎の傳道を爲す中、自ら其の病毒に感染して、遂に意を決して癩病患者救濟の爲に其の一身を捧げ、現にヒマラヤ山麓の或る癩病院の院長として、多數の同病者の師友と爲り居る人である。其の心中の苦しき煩悶、床しきアキラメ、けだかき信仰の跡を見ては、誰人も泣かずには居られぬ。今や日本に於ても癩病患者救濟が世上の問題となつて居る折柄、此の小冊子は必ず多くの讀者を得る事と信ずる。（價五錢、京橋區銀座敎文館）

▲**家と女**（巖谷小波著）　卷頭の「新日本の婦人」と題する文中に「夫は外に働き、婦は内に勤める、是は恐らく天の職であらう。然し只衣服の綻びを縫ひ、三度の食事の菜を見立て、乃至小使帳を落無く付けるのみが、所謂内助とは云はれぬのである」「此際の覺悟としては、活潑なる進取の氣象と、毅然たる獨立の精神とを、今日の日本婦人、即ち一種の國民敎育者、社會改良者としての諸姉に、切に望むの他は無い」とあるので、巖谷君の婦人觀の大體は察せられる。吾人は更に一歩を進めて、何故に「夫は外、婦は內」なるかを疑うて貰ひたいのだけれど、それは此著者に望むべき事ではあるまい。兎に角本書は「新家庭」「細君低語」「郎君放語」「社交意見」「家庭遊戲」等多くは穩和着實なる意見と趣味とを含んで居る。殊に元祿模樣か何かの製本あざやかなる所、善く著者の趣味を示して居る。（價七十五錢、京橋區尾張町隆文館）

▲**婦人世界**（第一號）　今度新に出でたるもの、體裁も善く內容もタップリした雜誌である其の立場は「諸姉は女性の本分としては完全なる家庭の主婦となり、夫を助け、子を育て、以て社會の單位となるべき善良なる家庭を作り、個人の天職としては其家庭を作るの餘力を以て其性質に最も適當せる國家社會の慈善的、衛生的、宗敎的、風敎的、社交的方面に活動すべき義務あるものなり」といふ位な者で、進步的保守主義、若しくば躊躇的進步主義といふべきも

の。それでも流石に「女子は男子の從者にあらず、附屬物にあらず」といふ丈が有がたい。（十五錢、京橋區南紺屋町實業之日本社）

▲女子文藝（第一號）　是は何だか雜駁で、只いろ〳〵なものが賑かに集めてある。何しろ「女子」に關する雜誌類の澤山出るには驚かされる。讀者諸君も嘸おいそがしい事と御察し申す

▲獨立評論（卅九年第一號）　本號より山路愛山君の「大盜通信」と題する小說が載りはじめた。「淸國の內部的生活を寫し、東亞の全局に對する作者の所感に小說的の色彩を加へんと欲するものなり」と。愛山君も今後小說家の領分を侵す積りと見ゆ。今の謂ゆる文士以外の、博學達識の人が小說界に足を踏み入れる樣にならねば、日本の小說は話にならぬ。今後は屹度いろ〳〵な新風の小說が現はれるであらう。（價十錢、東京澁谷其發行所）

▲イワンの馬鹿（內田魯庵譯）　トルストイの有名な寓意談を譯したもの。世の中は黃金でも兵隊でも治まらぬ、只だ馬鹿の如く勞働する者が最後の勝利を得るといふ話。勞働主義、農本主義、平和主義、無抵抗主義の福音として、トルストイの思想の大體を見るには最も適當な書である。（價廿錢、牛込山伏町火樓會）

▲雅歌之研究（加島汀月著）　「抒情的歌劇、及び愛の歌としての雅歌」「擬人的叙景詩としての雅歌」「基督教の經典としての雅歌」などゝ章を別ち、舊約聖書中の「雅歌」を解釋したるもの。吾人門外漢が批評すべき限にはあらねど、眞摯なる著者を知れる吾人は、此の著の必ず有益の者なるを信ず。（價廿錢、神田猿樂町中庸堂）

▲二十世紀の婦人（第三卷第一號）　今井歌子氏の經營する所にして、今の婦人雜誌中、最も進步的の意氣を有するもの。吾人は滿腹の同情と敬意とを此の雜誌に寄す。卷頭の辭に曰く「生存競爭の劇しき二十世紀の社會に立ちて、何事かを爲し得る婦人の一人なりとも多かれと欲するは、本誌が幾多婦人雜誌の中に產聲を擧げし所以なり、今の世は婦人の外觀の美しきを求め蓋に悶え百合に泣きて淸紫二女の後繼者を望む時にあらざるなり」（價十錢、麴町區飯田町五丁目、其社）

▲明治の母（第六號）　明治母の會の機關、菅谷伊和子氏の編輯する所、伊和子氏の理想に曰く「私の望む國は富豪も無ければ乞丐もなく貴人も賤者も何もなく、……世襲財產もなければ私有物もない、金錢もなければ債務もない、……各人總てのものは總ての人々の共有物で、

その性狀に從つて其業務に從事し、神が人類に命じ給ひし務を完うする所であります……私は其樣なる樂園に住居し、母として子供を敎育して、自分の好む職に從事したいのであります」（價六錢、小石川上富坂町、明治母の會）

* * * * *

▲經濟新聞（每週月曜）　日本橋小網町　其社
▲婦女新聞（每週月曜）　牛込東五軒町　其社
▲家庭週報（每週土曜）　女子大學校內櫻楓會
▲大阪婦女新聞（每月三回）大阪西區江戶堀其社
▲少女新聞（二ノ一二）　淺草松淸町　少女敎會
▲無我の愛（每月二回）　府下巢鴨　無我苑
▲東京孤兒院月報（每月一回）靑山　東京孤兒院
▲福田會月報（每月一回）麻布笄町　其會育兒院
▲家庭の栞（每月一回）新潟長岡女子師範敎育會
▲工業の花（每月三回）大阪東區瓦町職工敎育會
▲敎育公報　每月一回）神田一ツ橋　帝國敎育會
▲英學生（每月二回）　神田表神保町　東西社
▲婦人新報（每月一回）　府下澁谷村　其社
▲明治の母（六）　小石川上富坂町二三　其會
▲家庭の友（每月一回）本鄕駒込　內外出版協會
▲うらにしき（每月一回）駿河臺北甲賀町尙絅社
▲少年（每月一回）　京橋區南鍋町　時事新報社
▲帝國畜報（二ノ一）　神田裏神保町　富山房
▲光（每月二回）　本鄕駒込動坂町五四　凡人社
▲新人（七ノ一）小石川表町一〇九　其社事務所
▲國民評論（一ノ一）　京橋區宮島町一　其社
▲對露撰擧準備論策（澤龜次郎著、全一册價二十錢）　神田南甲賀町八　天眞社

▲新佛教(每月一回)駒込片町　新佛教徒同志會
▲鬼馬の友(每月一回)靜岡縣濱松　徒弟共勵會
▲青年(二)　前橋市曲輪町一〇七　其社
▲交通世界(七九)　埼玉縣浦和町　交通協會
▲日本の家庭(每月一回)神田表神保町　同文館
▲月刊スケッチ(每月一回)　本鄉眞砂町　其會
▲會津新聞(一〇)　福島縣若松市老町　其社
▲產科婦雜誌(七三)日本橋區濱町　楠田病院內
▲光風(二ノ一)　本鄉眞砂町三七　其發行所
▲大阪タイムス(每週日曜)　大阪北區　其社
▲自然(產業新報號外)　群馬縣中條　產業團
▲年!!(工業の花新年增刊)　大阪　職工教育會
▲帝國新報(三)　京橋區木挽町九　其社支局
▲紀陽新聞(日刊)　和歌山市十二番町　其社
▲埼玉衞生新誌(一八)　埼玉縣浦和町　其社
▲Romaji(二、三)本鄉東片町一一　新公論社
▲博物學雜誌(六五)　神田五軒町　動物標本社
▲正則中學講義錄(每月二回)大日本國民中學會
▲新國民(新年號)　神田南甲賀町十　前同會
▲弘道(一六六)　麴町區飯田町　日本弘道會
▲青春(七)　本鄉眞砂町十七　平民書房
▲東京市報(三四)　神田錦町三ノ廿四　其社
▲二十世紀の婦人(三ノ二)　北海道婦人同志會
▲商家の友(每月一回)　京橋區　時事新報社
▲常盤(每月一回)　橫濱山手二二一　其社
▲好學雜誌(三ノ一)　麴町三番町八三　好學會
▲梨園の華(一)　大阪東區瓦町五　其發行所
▲法律新聞(三二八)日本橋區本銀町四ノ九其社

●婦人新論の序

堺　利彥

婦人問題は勃然として日本の社會に起つて來た。然しながら、我が學者、文人、政治家、道德家、宗教家等の之に關する論議を見るに、多くは皆な姑息彌縫の救濟策で、根本的解決に近づいた者は殆んど無い。それも其筈で、當代社會問題の全體に對して只茫然たるが如き者が、其の社會問題の一部たる婦人問題に對して、確乎たる態度を定め得ぬは、亦た當然の事である。

予は社會問題の全體に對して、社會主義を取る者であるので、婦人問題に對しても亦た、此の社會主義の見地よりして、ほゞ根本的解決に到達し得たと信ずる。「婦人新論」は即ち其の解決の發表である。

但し、「婦人新論」は決して予の獨創の見では無い。予の「婦人新論」は、予の社會主義と同じく、先進の學者に依つて予の胸に植ゑられ、予の心に育てられた者である。殊に直接には、甚だ多く左の三書に負ふ所がある。

Woman in the Past, Present and Future.　By A. Bebel.

Love,s Coming-of Age　By E. Carpenter.

Sex Radicalism.　By D. Forster.

第一の「過去、現在、及び未來に於ける婦人」の著者ベーベル氏は、獨逸社會黨の首領である。第二の「愛の成熟時代」の著者カーペンター氏は、英國の哲學者にして又社會主義者である。第三の「性交急進主義」は米國シカゴ市のハルマン氏の發行する所である。ハルマン氏はルシフアー(明星)と題する、兩性問題研究の專門雜誌を出だし、七十歲の高齡を以て、之が爲に屢々牢獄の苦楚を嘗め、極めて大胆なる自由意見を發表して居る人である。

予は此の婦人新論が、其の大胆にして新奇なる點に於て、稍や世を驚かす可きを想ふと同時に、又其の細心にして自然なる點に於て、必ず眞摯なる讀者の贊同を得べきを信ず。

* * * * *

no ni-dai-dōtoku wa iwaku "Inochi wa ke yori mo karui," iwaku "Seison no tame ni i wo mochii, zaika wo atsumuru koto ni kyūkyū taru wa samurai no torazaru tokoro. Zaika wa chiri no gotoshi" de aru. Jisei to iu mono wa okashina mone de, kaku no gotoki machigatta shugi demo taihen ni kōshō na shugi no gotoku ni omowarete ita koto ga aru......Ima no bummei no yo no naka ni ite mo mada mukashi no yume ga samenaide, kono doreishugi wo arigatagatte iru mono ga aru. Samurai-shugi wa jitsuni kiku mo imaimashii dorei-shugi de aru...... Renchi, sessō, keppaku, chūsei, nado iu toku mo mina kono dorei-shugi kara waridashita no de, konnichi no kōshō naru hommu, gimu, kōhei, seichoku, hakuai nado no toku to toshi wo onajiushite katarubeki mono dewa nai.........

Moshi waga kuni ni genkon okonawarete iru shugi de kuni no shimpo no daigai wo nasu mono ari to seba, sore wa Remmon ni arazu, Tenri ni arazu, jitsuni Bushidō de aru. Moshi ima oshinokenakute naranai, uchikowasanakute naranai dōtokukyō ari to seba, so wa Yasokyō ni arazu, Bukkyō ni mo arazu, jitsuni Bushidō de aru.

—"Rômaji" dai 3gô kara nuita.

SÔZÔ (*Originality*) TO MOHÔ (*Imitation*).

Sawayanagi Masatarô.

.........Nipponjin ga mohô ni chôjite or to iu nomo, tada mohô nomi site, sukosimo kairyô wo kuwae nai to iu nodewa nai. Ina, Nipponjin wa tano mono wo totte, waga mono to suru ni tsitewa kanarads kore ni kairyô wo kuwaete waga mono to suru; sore kara jenji kairyô wo kuwaete yamanai. Kono kairyô wo kuwaete yamanai to iu kotowa, sôzô ijô no neuti ga aru to omou, suknak mo onaji neuti de aru. Mosi tano mono wo totte kairyô wo kuwaete yuku koto wo mohô to iu naraba, Nipponjin wa mohô ni chôjite oruto iu koto wa gômo warewareno aikokushin wo kidstskru monode nai. Yo wa waga kokjin ga yayamosureba sôzôryok ni amari kadai no neuti wo oite, kairyô suru koto no neuti wo shiru koto ga suknaiyô ni omou nowo ikan ni kanzuru mono de aru.........

—"Rômaji" dai 3gô kara.

RÔMAJI TO ZASSYI.

Rômaji Hirome-kwai dewa Rômaji bakari de kaita "Rômaji" to iu zassyi o hakkôsyite ir. Kono hoka Rômaji o hirometai to iu kokoro kara Rômaji no ran o oite ar zassyi wa waga Katei Zassyi oyobi Yumoto Takehiko kun no "Kyôik Jiron," Iwaya Sasanami kun no "Syônen Sekai," no tada mitts des. Yononaka wa kairyô to iu koto niwa zuibun reitanna mono da.

(F. S.)

RÔMAJI RAN

SEKAI-GO ESPERANTO.

Mosi Sekai no Shotaikok ga itchisite, mina onajik ar hitots no Gaikok-Go o Gakkō de osier koto ni sitanaraba, sono Gaikok-Go ga snawachi Sekai-Go to narno de ar. Yōroppa no chūsei ni oitewa, Latin-Go ga Sekai-Go ni narikakete ita. Jūkseiki no Hajime ni oitewa, Frans-Go ga Latin-Go ni kawatte Sekai-Go ni narisō ni omowareta. Sikarni, Konnichi ni oitewa, Frans-Go, Ei-Go, Doits-Go, mina seiryok-ar hitsyōna Kok-Go to natta. Sokode, shokok tomo, dono Gaikok-Go o omo ni osiete yoika wakaranak natta. Nippon nado dewa, Ei, Dok, Futs, San-Gok no Go ni tsūzeneba Gaksharasik nai to iu yōna koto ni natta. Kono Arisama dewa, otagai-ni Gaikok-Go no tame ni ōk no Seiryok o tsuiyasite, fben sigok, fkeizai sigok de ar. Sokode atarasii Sekai-Go Esperanto no Ryūkō to natta. Ryūkō to ittemo, mada mochiron yōchina mono de arga, Sekai-Kakkok sono Kenkyūkai no nai Tokoro wa hotond nai. Nippon demo Konogoro skosizuts Kenkyūsha ga dekikaketa.

Kono Esperanto wa Yōroppa no Shokok-Go no Sui o nuita mono de, kiwamete kisok-tadasik, kiwamete kantande ar. Sorede, Yōroppa no ar Ikkok-Go ni tsūjita mono naraba, 3 ga Gets krai keiko sreba, hobo dekir yōni nar to no koto.

Bok mo ima skosi-zuts yarikakete irga, ikanimo yok dekite ir to omou. Tatoete ieba, genzai no Shokok-Go wa Tōkyō no Machi no gotok, fkisok de, magari-knette, osorosii-hodo sakzats-site ir. Sikarni Esperanto wa sukkari Sik-kaisei o okonōta ato no yō de, Chitsjo seizen to site, skosi-mo fkisok-na Tokoro ga nak, kantan-de, meiryō-de, ikken-site sono Daitai ni tsūzur koto ga dekir.

Shumi no ue kara iunaraba, mata Bets no Giron mo ar de arō ga, tonikak Bok wa kono benri na mono ga Ichijits mo hayak sekai ippan-ni okonawaren koto o kibō-sezar o enu. (T. S.)

SHINKŌ TO DŌTOKU.

Mukō Gunji.

GANRAI Samurai-shugi to iu mono wa Hōken no seido wo moto ni shite tateta mono de aru. Hōken no yo dewa nō, kō, shō wa takara wo tsukuridasu tame no dōgu de atte. samurai wa kimi wo mamoru tame no ningen na no de aru. Tokoroga samurai no seison no hitsuyō wa ....kuni no tame aruiwa kimi no tame de aru no da kara, jibun de jibun no seison wo hakaru hitsuyō wa nai yō ni shikunde aru......... Kono shisō yori shōjite kita samurai

●同志に訴ふ

▲我が「家庭雜誌」が、單に營業の爲の商品に非ざることは、諸君の久しく既に認めたまふ所であらう。然しながら、我等同人は聊か此の主義を以て世に貢献せんと欲すると同時に、又此の事業に依りて飮食の道を得んとする者である。

▲故に我等の主義を賛し、我等の志を憐まるゝ諸君は、此の主義の擴張を助けんが爲に、又我等の生活を助けんが爲に、其の知人間に勸誘して「家庭雜誌」の新購讀者を作り玉はんことを望む。

▲斯くて我等の力と諸君の力とを併せて、我等の事業は始めて少しく世を動かすに足るであらう。

●次號中の豫定記事

家庭雜誌　第四卷第一號　目次

本誌代價	一部 金十錢 六ヶ月前金五十五錢 一ヶ年前金壹圓 （何れも郵稅共）
廣告料	特別一頁 十圓 普通一頁 七圓

▲本誌は毎月一回（一日）發行とす。

▲代價は小爲替を以てお送り下さい。郵劵代用ならば五厘切手で一割増に願ひます。

▲御手紙には必ず住所姓名をハッキリとお書き下さい。又御轉居の際は新舊の宿所を併せて御通知を乞ふ。

▲本誌は前金でなくては一切御註文に應じませぬ。前金の切れた時には帶封に「前金切」と朱印を捺して上げますから御注意下さい。

▲歐米諸國よりの御注文は別に一册に付二錢づゝの郵稅を申受けます。

明治三十九年一月廿九日印刷
明治三十九年二月　一日發行

東京市麹町區元園町一丁目廿七番地
發行兼編輯人　堺　利彥

東京市京橋區日吉町十番地
印刷人　中村潮助

發行所　東京市麹町區元園町一丁目廿七番地　由分社

大賣捌所　上田屋　東京堂

新紀元 第四號

二月十日發行

▲重要目次▲日かげの女王(木下尚江)▲唯物的社會主義者基督教的社會主義者に與ふる書(白石喜之助)▲聖母マリアの革命思想(石川三四郎)▲獨占事業論(安部磯雄)▲世界平和の進化(一平民)▲榛名山上より(徳冨健次郎)
▲毎月一回十日發行▲一部十二錢、半年七十錢、一年一圓卅五錢▲第一號四版、第二號再版出來
▲東京新宿角筈七六二 新紀元社

文藝評論 火鞭 第六號

二月十日發行

▲第六號要目▲醫學の跳梁(記者)▲基督教的社會主義を許す(秀湖)▲小說「雲の色」(馬手)▲上帝暴虐論(孤劍)▲メタロの夫婦觀を論ず(翠湖)▲小說「亡靈」(路遙)▲勞力道德論(暢生)▲第四號には當代二十餘家の「戀愛に對する見解」あり▲第五號(新年號)は特に紙數を二倍大とし丙午文壇の一偉觀たり(本號は特に十六錢とす)▲一部十錢、半年五十八錢、一年一圓十錢▲本鄉眞砂町十七 平民書房

思想界の天使 神園 第一號

二月一日發行

▲吾等は神の意を信じ神の愛を慕うて地上の天國たらしむべく田園の間に新天地を開拓して勞働の餘暇神の使命を奉じて新福音を宣傳するが爲に本誌を發行す▲第一號要目▲吾等の歌▲社會主義者と宗教家▲教育學者と教育家▲神園の本領▲神園社の宣言書▲勤勞集▲我異常なる結婚(以上加藤一夫)▲奴隸制度の家庭(深尾韶)▲あゝ迷信▲神園發行の動機(以上松聚)▲毎月二回一日十五日發行▲價一部四錢、十部三十八錢、二十部七十五錢、郵税不要▲申込は前金に限る郵券代用は五厘切手にて一割增とす▲加藤安世編輯▲茨城縣古河町九七〇 神園社

由分社書籍目錄

(十錢以下の御注文には別に郵税二錢を要す)

- 社會問題解釋法(安部磯雄氏著) 價一圓廿錢
- 社會主義入門(平民社同人編) 價十錢
- 消費組合の話(石川旭山氏著) 價十二錢
- 地上の理想國 瑞西(安部磯雄氏著) 價十五錢
- 社會民主黨建設者 ラサール(幸德秋水氏著) 價十五錢
- 土地國有論(西川光二郎氏著) 價十錢
- 富の壓制(西川光二郎氏著) 價十錢
- 經濟進化論(田添鐵二氏著) 價十五錢
- 革命婦人(平民社同人編) 價十二錢
- 百年後の新社會(堺利彥譯) 價五錢
- 理想鄉(堺利彥譯) 價五錢
- 英國勞働界の偉人 バアンス(西川光二郎氏著) 價五錢
- マルクス(少々汚損)(西川光二郎氏著) 價五錢
- 通俗社會主義(堺利彥著) 價二錢
- 普通撰擧の話(西川光二郎氏著) 價一錢
- 社會主義神髓(幸德秋水氏著) 減價二十錢
- 廿世紀の怪物 帝國主義(幸德秋水氏著) 價廿五錢

- 小說 新社會(矢野文雄氏著) 價四十五錢
- 小說 火の柱(木下尚江氏著) 價卅五錢
- 小說 良人の自白 上中下 全三冊(木下尚江氏著) 價壹圓
- 小說 勞働問題(堺利彥譯) 價卅五錢
- 家庭の新風味(堺利彥著) 價壹圓
- 家庭夜話(堺利彥編) 價壹圓
- 枯川隨筆(堺利彥著) 價二十錢
- 言文一致 普通文(堺利彥著) 價廿五錢
- 我家の犬猫(堺利彥著) 價八錢
- 小品文集 半生の墓(堺利彥著) 價卅五錢
- 少年叢書 目のある人(堺利彥著) 價十錢
- 小品千題 智識と趣味(斯波貞吉氏編) 價卅五錢
- 青年と生存競爭(安藤兒毛喜氏著) 價二十錢
- 少年少女 新遊戲集(西村渚山氏著) 價廿五錢
- 社會主義名士肖像 畫葉書(一組六枚) 價十錢
- 家庭雜誌合本(第二卷) 價五十錢
- 家庭雜誌合本(第三卷) 價八十錢

發行所 東京市麹町區元園町一丁目 由分社

子供を愛する人と趣味を
尊ぶ人には必讀の書なり

西村渚山新著

少年少女 新遊戯集

一冊廿五錢郵稅四錢

此書は單に少年男女に對して面白き新案の遊戯法を教へんとするの外、第一にその心性を陶冶し、第二に其判斷力、思考力、記臆力、及び五官の働きを敏活ならしめ、第三には地理、歴史、博物等の普通智識を不知々々の間に會得せしめんとするなり。されば、其遊戯の種類頗る多く、假令へば、交際的のもの、冒險的のもの、滑稽なるもの、學術的のもの、事務的のもの、空想的のもの、芝居の如きもの等一々擧げて數ふべからず。學校に於ける遊戯運動の參考書として、若くは家庭の遊樂顧問としても、必ず一本を備へて可なるべきを信ず。

▼本誌の讀者に限り郵稅は當方にて負擔の事▼

大日本國幼年會發行

麹町 由分社 取次

社會主義中央機關 光

●每月二回、五日廿日發行●一部三錢五厘、廿部前金六十五錢、郵税不要

日本に於ける社會主義の大思潮に接し、普通選擧運動の大勢を知らんと欲するものは本紙を讀まざるべからず

第五號（一月廿日發行）要目

●申込所 東京本郷駒込動坂町五四 凡人社

火鞭叢書

發兌元 東京市牛込區南山伏町一四 火鞭會

教訓的小說 初版賣切

戰勝に傲る者よ、媾和に憤る者よ、權力に渇する者よ、富貴に淫する者よ、生活に勞るゝ者よ、眞理に渇ゆる者よ、

((一月元日發賣))

トルストイ主義の闡明

トルストイ 内田魯庵譯

イワンの馬鹿

◆定價廿錢郵税不要◆

此渺たる小册子を讀んで**馬鹿者イワン**の愚なる生涯に一大教訓の潜藏するを發見せよ、

勞働の福音 再版出來

發賣元 東京市本郷區眞砂町一七 平民書房



腦病 靜靖丸 頭痛

腦力を明快にし腦病神經病を全治す

腦病 にて常に頭重く、記憶弱力く、忍耐力薄く、氣鬱ぎ、不眠、頭痛を煩ふ人

神經 症にて僅の事を苦慮し、常に動悸、息ぎれを感じ怒り易く、悲み易く、心弱き人

逆上 症にて常に顔紅く、頭痛、眩暈し、耳鳴目かすみ、肩凝り背重く、便通少なき人

頭痛 症にて學生の常に煩ふ勉學性頭痛、感冒、徹夜、苦慮等より發する者其他總ての頭痛及ひ頭痛持の人

不眠 神經家又は老人等の夜分安眠を得ざる人、亦は苦慮、悲痛、等にて眠むられざる人

其他常に腦を勞する人及神經家亦は大酒家、肥滿家は持藥として此藥を服用せらるべし腦力を强健にし精神を快活ならしめ、中風、卒中風を豫防する希有の偉効あり、

藥價 〔二日分弱金拾錢　廿二日分（常備用）金壹圓　十日分金五拾錢
六日分金三拾錢　四日分金貳拾錢〕

本舗 東京市日本橋區藥研堀町 藥劑師 高木與八郎

逆上を引下げ睡眠を催し頭痛を即治す